スペイン　ドライブ旅行記
pdf版

平成１２年１０月２６日
平成１４年１１月１０日(改)
平成15年2月6日(pdf化)
阿 部 敏 雄(敏翁)

この旅行記は、平成７年５月８日から２９日までスペインをレンタカーによるドライブ旅行したときのもので、本テキストの原文は、パソコン通信ネットＰＣ－ＶＡＮ の ＳＩＧ「日本トラベルクラブ　(NTRAVEL)」の中のフォーラム　２．ワールド「世界の旅」に掲載したものですが、それを主体としてそれに画像を加えてみました。
尚、「敏翁」とは、小生のニックネームです。

Ⅰ．概要 2
1.1　スペイン・ドライブ旅行　概略図 2
1.2　旅行の特徴 2
1.3　概略行程表 3
1.4　　レンタカー（纏め） 3
1.5　持参した主な物 4
Ⅱ．　マドリッド 5
Ⅲ．　セビーリャ 7
Ⅳ．　コリア・デル・リオ 8
Ⅴ．　コルドバ 10
Ⅵ．　グラナダ 12
ロルカ公園 13
Ⅶ．　バルセロナ 14
Ⅷ．　モンセラット、カルドナ 15
カルドナ 15
Ⅸ．　ソルソーナ、ビック 17
エル・ミラクル、オリウス 18
ビック 18
Ⅹ．リポール、フィゲラス 19
ⅩⅠ．　ジローナ、バルセロナ 21
サン・ペレ・デ・ローダ 21
ⅩⅡ．　パンプローナ、ハカ、サングエサ 22
ハビエル城 24
サン・ファン・デ・ラ・ペーニャ 24
ⅩⅢ．　ロンセスバージェス、プエンタ・ラ・レイナ、ロス・アルコス 25
ⅩⅣ．　ブルゴス、サント・ドミンゴ・デ・シロス 27
サント・ドミンゴ・デ・シロス 29
ⅩⅤ．　フロミスタ、サアグン、レオン 30
ⅩⅥ．　アストルガ　から　ビリャフランカ・デル・ビエルソ 33
ⅩⅦ．　オ・セブレイロ　から　アルスア 35
ⅩⅧ．　コンポステーラ、パドロン、フィニステーレ 36
パドロン・西の塔 38
サンチャゴ・デ・コンポステイラ 40
フィニステーレ 43
追記 44

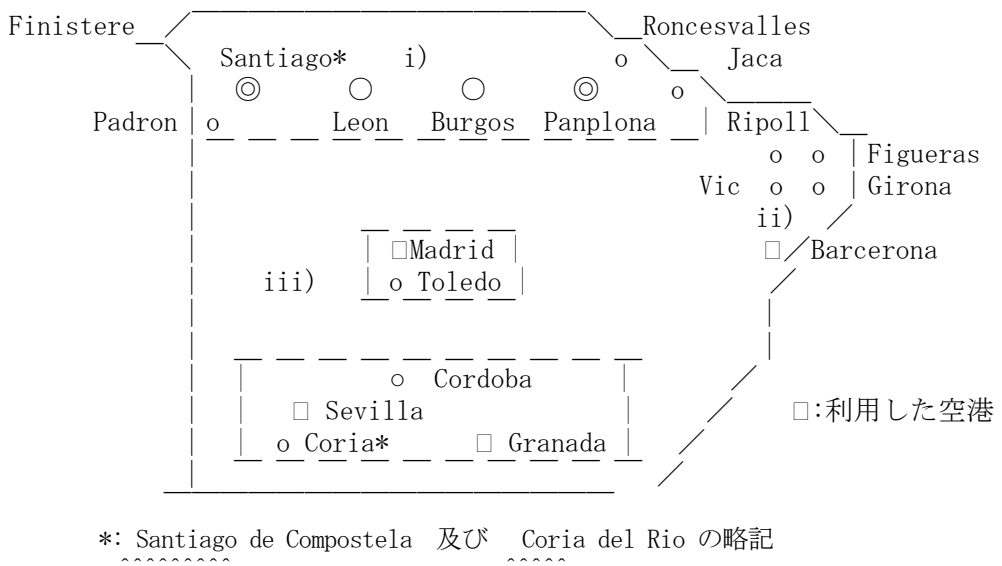
#60/76　ワールド「世界の旅」　　｜　ダウン・ロードした場合
★タイトル（WDJ17088）　95/ 6/28　21:43　（196）　　｜　この形式になる。
スペイン　ドライブ旅行記（１）　　敏翁　　｜　（２）以降では省略形を用いる。

はじめに

本稿は、今回のスペイン旅行についての記録の決定版にする積もりです。
帰国後、忘れない内にと１０日ばかりで書き上げたものは、ＮＩＦＴＹの FWORLDT にアップしました。それに帰国後に得た情報なども含めて書き足し、再アレンジなど推敲したものが、本稿です。
実は、昨年四国八十八ヶ所を車で回ったとき、車にパソコンを積み、時々泊まったモジュラー・ジャックのあるホテルからパソ通でＮＩＦＴＹにアップした時も、帰宅後改訂版をＰＣ－ＶＡＮにアップしております。

Ⅰ．概要

1.1　スペイン・ドライブ旅行　概略図



1.2　旅行の特徴

i)　サンチャゴ巡礼（５月２０日～２７日）

キリスト教三大巡礼路の一つであるサンチャゴ・デ・コンポステーラに向けての巡礼路を車で回ろうとするものです。サンチャゴ・デ・コンポステーラは、スペインの西北端（フィニステレ：地の果て）近くにある聖地で、その名前を意訳すれば「星の野のサンチャゴ」と言う意味です。スペイン語のサンチャゴは聖ヤコブ（フランス語でサンジャック、英語でセイント・ジェイムズ）の事です。
この地に、聖ヤコブの遺骸があると信じられていますが、聖書には、その外典、偽典を含めてその記述は有りません。全くの伝説であり、ヤコブ・デ・ウォラギネス「黄金伝説」人文書院　の第二巻に載っています。
信仰とはその様なものでしょう。しかしこれがレコンキスタの力の源となったのは歴史的な事実のようで、マタモロス（モーロ人殺し）のサンチャゴは力の象徴でした。そこへの巡礼が盛んになり、最盛時には年間数十万人がヨーロッパ各地から訪れたと言われています。

日本の巡礼路の次に、ここを回り比較検討してみようと思った訳です。
パンプローナを起点にして、サンチャゴまでレンタカーで回りました。

ii)　カタルーニャのロマネスク美術を訪ねる（５月１５日～１９日）

上記 i）を調べていくと、巡礼路が作られていく時代が、（プレ）ロマネスクの時代に重なっている事が解ります。その時代の美術がサンチャゴ巡礼路と共に、豊富に且つ魅力ある特徴を持って残されていると言われるカタルーニャに、（プレ）ロマネスク美術を訪ね、当時の人々の心に触れてみたいと思った訳です。

バルセロナを起点にして、その北方をレンタカーで回りました。

iii）その他

折角スペインに行くのであるから、マドリッド、アンダルシァも訪れたいと思いました。それで調べている内に、セビリヤ近くのコリア・デル・リオに「ハポン（＝日本）」と言う姓を持つ人々が約９００人居る事を知りました。
支倉(ﾊｾｸﾗ)常長　の部下の人々の一部が残り、その子孫と信じられているようです。この辺の事情は、逢坂剛著「ハポン追跡」に詳しく紹介されています。
となると、ここにも行って見たくなりました。
と言うのは、私の母方の先祖が常長の従士として「遣欧使節」に参加していたらしいと言われているからです。この事は、樫山巌著「支倉常長の総て」 金港堂 に出ています。尚、樫山氏は、宮城県柴田郡川崎町大字支倉（常長の領地であった）におられる郷土史家です。
実は、私の父母の実家も川崎町で、私も昨年支倉で樫山氏に会っています。
全く、「事実は小説より奇なり」ですね。

1.3　概略行程表

５月

日	曜	主要訪問先等	泊
8	月	成田 --(air)--> ﾏﾄﾞﾘｯﾄﾞ	ﾏﾄﾞﾘｯﾄﾞ
9	火	市内観光	〃
10	水	〈ﾚﾝﾀｶｰ〉　ﾄﾚﾄﾞ	〃
11	木	ﾏﾄﾞﾘｯﾄﾞ --(air)--> ｾﾋﾞﾘﾔ　〈ﾚﾝﾀｶｰ〉　ｾﾋﾞﾘﾔ	ｾﾋﾞﾘﾔ
12	金	ｺﾘﾔ･ﾃﾞﾙ･ﾘｵ、 ｺﾙﾄﾞﾊﾞ	ｺﾙﾄﾞﾊﾞ
13	土	ｺﾙﾄﾞﾊﾞ、 ﾒﾃﾞｨﾅ･ｱｻｰﾗ	〃
14	日	ｱﾙﾊﾝﾌﾞﾗ	ｸﾞﾗﾅﾀﾞ
15	月	ｶﾞｳﾃﾞｨｸｽ、ﾛﾙｶ公園、ｸﾞﾗﾅﾀﾞ--(air)--> ﾊﾞﾙｾﾛﾅ　〈ﾚﾝﾀｶｰ〉	ﾊﾞﾙｾﾛﾅ
16	火	ﾓﾝｾﾗｯﾄ、 ｶﾙﾄﾞﾅ	ｶﾙﾄﾞﾅ
17	水	ｿﾙｿｰﾅ、ｵﾘｳｽ、ｳﾞｨｯｸ	ｳﾞｨｯｸ
18	木	ﾘﾎﾟｰﾙ、ﾌｨｹﾞﾗｽ	ﾌｨｹﾞﾗｽ
19	金	ｻﾝ･ﾍﾟﾚ･ﾃﾞ･ﾛｰﾀﾞ、ｼﾞﾛｰﾅ、ﾊﾞﾙｾﾛﾅ--(air)-->ﾊﾟﾝﾌﾟﾛｰﾅ　〈ﾚﾝﾀｶｰ〉	ﾊﾟﾝﾌﾟﾛｰﾅ
20	土	ﾊﾟﾝﾌﾟﾛｰﾅ、ﾚｲﾚ、ﾊﾋﾞｴﾙ、ﾊｶ、ｻﾝ･ﾌｧﾝ･ﾃﾞ･ﾗ･ﾍﾟｰﾆｬ	ｻﾝｸﾞｪｯｻ
21	日	ｻﾝｸﾞｪｯｻ、 ﾛﾝｾｽﾊﾞｰｼﾞｪｽ、ﾌﾟｴﾝﾀ･ﾗ･ﾚｲﾅ、ｴｽﾃｰｼﾞｬ	ﾛｽ･ｱﾙｺｽ
22	月	ｻﾝﾄ･ﾄﾞﾐﾝｺﾞ･ﾃﾞ･ﾗ･ｶﾙｻｰﾀﾞ、ﾌﾞﾙｺﾞｽ、ｻﾝﾄ･ﾄﾞﾐﾝｺﾞ･ﾃﾞ･ｼﾛｽ	ｼﾛｽ*
23	火	ﾌﾛﾐｽﾀ、ｻｸﾞｰﾝ、ﾚｵﾝ	ﾚｵﾝ
24	水	ﾚｵﾝ、 ｱｽﾄﾙｶﾞ、ﾋﾞﾘｬﾌﾗﾝｶ･ﾃﾞﾙ･ﾋﾞｴﾙｿﾞ	ﾋﾞﾘｬﾌﾗﾝｶ*
25	木	ｵ･ｾﾌﾞﾚｲﾛ、 ﾎﾟｰﾄﾏﾘﾝ、 ｱﾙｽｱ	ｱﾙｽｱ
26	金	ｻﾝﾁｬｺﾞ･ﾃﾞ･ｺﾝﾎﾟｽﾃｰﾗ、 ﾊﾟﾄﾞﾛﾝ、 ﾄｰﾚｽ･ﾃﾞ･ｵｴｽﾃ	ｻﾝﾁｬｺﾞ*
27	土	ｻﾝﾁｬｺﾞ*、ﾌｨﾆｽﾃｰﾚ	〃
28	日	ｻﾝﾁｬｺﾞ* --(air)--> ﾏﾄﾞﾘｯﾄﾞ --(air)--	
29	月	--> 成田	

＊：前後の関係から自明であり、省略名を用いた。

1.4　レンタカー（纏め）

レンタカーは全てＡＶＩＳで、日本国内で予約して行った。
マドリッドだけは市内のオフィスで借り、同空港返し、後は空港での借り、返しであった。但しバルセロナは同一空港だったが、セビリヤ --(car)--> グラナダ、及び パンプローナ --(car)--> サンチャゴは、乗り捨てであった。
車種は、全部同一で　ルノー１９　1800CC ｵｰﾄﾏﾁｯｸ 4ﾄﾞｱｾﾀﾞﾝ 全長4248mm、幅1696mm 防犯装置付きであった。私の車
（ﾄﾖﾀ･ﾋﾞｽﾀ 4650mm）よりだいぶ短く、だいぶ無茶な運転（行き過ぎてはＵターンなど）もしたが扱い易い車だった。私の
日本での要求は、セビリヤだけエアコン付きだったが、実際は最期の車を除いて全てエアコン付きであった。
やはりアンダルシァは５月でも暑く、エアコンで助かった。

走行距離は、
マドリッド　180 km、　セビーリヤ　－＞ グラナダ　603 km、
バルセロナ　738 km、　パンプローナ －＞ サンチャゴ　1764 km、 計　3285 km であった。

料金は、６月２１日ＶＩＳＡカードから「ご利用代金明細書」が郵送されて来たので確定。定額制で、保険は総て入

っている。

	日数	料金（PTS）	備考
1) ﾏﾄﾞﾘｯﾄﾞ	1	24931	
2) ｾﾋﾞｰﾘｬ -> ｸﾞﾗﾅﾀﾞ	5	121243	ｽｰﾊﾟｰ･ﾊﾞﾘｭｳ
3) ﾊﾞﾙｾﾛﾅ	4	73309	
4) ﾊﾟﾝﾌﾟﾛｰﾅ -> ｻﾝﾁｬｺﾞ	9	138038	

日本での予約の時に、種々経緯があったのであるが、2）だけスーパーバリュウを使ってみたが、普通の条件より、かえって高い様である。AVIS JAPAN の女性（たどたどしい日本語で心配になったが）の話しでは、地域によってスーパーバリュウが安いとは限らないそうである。

1.5　持参した主な物

1.5.1　書籍類

1　スペイン語ミニ辞典　白水社　　西和・和西両方入っていて便利 。但しキリスト教、建築物等の専門用語では不十分だった。
2　ひとり歩きの　「スペイン語自由自在」　ＪＴＢ
3　瓜谷良平　「スペイン語の入門」　白水社
4　新リトル英和辞典 ＋ 新リトル和英辞典（合本）　研究社
5　地球の歩き方　スペイン　ダイヤモンド社
　本ＭＳＧの中では、「歩き方」と略記する事にする。
6　村田栄一　「スペイン　ロマネスク巡礼」　社会評論社
7　林ふじ子　「スペイン　プレロマネスク紀行」　皆美社
8　司馬遼太郎　「街道をゆく　22　南蛮のみち Ⅰ」　朝日新聞社
9　〃　〃　23　〃　Ⅱ」　〃
10　樫山巌　「支倉常長の総て」　金港堂
11　スペイン政府観光局で仕入れた資料類。

1.5.2　カメラ類

1　ニコン　24-50 ﾐﾘ ｽﾞｰﾑ　　他のレンズは置いて行ったが正解だった。
2　オリンパスμ　35ﾐﾘ
3　フィルム　ASA 400 36枚取り　８本、　ASA 1600 36枚取り　２本。
4　８ミリ・ビデオ（シャープ　ビュウカム）、 今度の旅行の為にワイド・コンバージョン を求め、持参したが、これ　　も正解だった。ビュウカム用電池（３コ）、とその充電器（２２０Ｖ対応になっている）とコンセント・アダプター
　シェーバー　充電と兼用）。
5　テープ　HI-8 60分　４本
4　双眼鏡

1.5.3　音楽関係

1　カセット・テープ
　○ ビートルズ全集（２巻）
　○ ジャック・ルーシェ編曲のバッハのインベンション等（以前ＦＭからとったもの）
　○ 森昌子ベスト２４
2　ＣＤ
　○ サント・ドミンゴ・デ・シロス合唱団によるグレゴリア聖歌（２巻）
　○ 「イスパヴォックス・フラメンコ・ＣＤ大全集」第４集（２枚組）
　○ 最新 有線カラオケ ヒット全曲集　（伍代夏子、藤あや子、渥美二郎 等）
　レンタカーにはカセットテープ・プレイヤーは付いていたが、ＣＤプレイヤーは付いていなかった。多分そうだろうと思ったので、ポータブル・ＣＤプレイヤーは持参したが、ドライブ中は聞かなかった。
　スペインの田舎道をドライブしているとき、一番ぴったり来たのは、意外にも森昌子だった。越冬つばめ、哀しみ本線日本海、とうきょう暮らし など聞きながら、ドライブするのはなかなかいいものですね。
　次回はマドリッドから始めましょう。

#61　95/ 6/28　　スペイン　ドライブ旅行記（２）　　敏翁

Ⅱ．　マドリッド

５月８日（月）

成田発　12:55 IB-6710　　マドリッド着　21:55
マドリッドでのタクシー代が２０００ペセタ（PTS）位とあったので、成田空港で５０００PTSだけ換金した（４２０４円）。
マドリッドは強い雨。マドリッド空港からAgumarホテル（4つ星）までタクシー代チップ込みで４０００PTS。
ホテル・　ポーターへ２００PTS。
たちまちペセタが無くなり、どうしようと考えていると、ＴＩＳイスパニャ社の社長のＹ氏より電話。
同社は、Ｔ社（小生の古巣）の電子機器（パソコンファックス等）の販売会社。９日夜会う事とする。
実は、交通事情の全く異なるスペインで、車を走らせる最初のところが心配だったので、Ｔ社の役員をしているM氏（昔の仕事仲間）にお願いし、いろいろな人のご好意があってマドリッドにいるＹ氏が小生の面倒を見る事になったもの。

５月９日（火）

とにかく、トラベラーズ・チェック（Ｔ／Ｃ　$）をペセタに変えねばならない。
Ｂａｎｃｏ　Ｅｓｐａｎｙａ（*）が率が良いとあったので探してみると同名の地下鉄駅（以下<M>と略）があるではないか。トライしてみよう。
尚ホテルはアトーチャ駅のそばで、<M>Atocha RENFE からあるいて５分のところにある。
同銀行に行ってみると、実に大きい（日本銀行本店に相当するのだから当然）。心配に成ってきたが入り口をようやく探し、入って行き窓口で換金出来るかと聞くと、何とＴ／Ｃは扱っていないという。同銀行を飛び出し、きょろきょろすると、道の向かいに大きな銀行（Banco Bilbao Vizcaya）があるので、そこに行ってみる。ここは全く換金業務はやっていないと言う。次に、そこから２～３分の距離にあるＢａｎｃｏ　Ｓａｎｔａｎｄｅｒ　に飛び込む。ここはやってくれそう。窓口中年の男は、Ｔ／Ｃとパスポートを持って奥の部屋に入ると５分も出てこない。出てくると今度は隣の窓口の業務に口を突っ込みぺちゃくちゃ。やっと本業務にかかる。やおら大判の手帳を取り出す。ﾎﾞｰﾙﾍﾟﾝでなにやらびっしり書き込みがある。それを睨みながら、何やら一生懸命計算をする。２～３分もかかったろうか。やっと換金出来た。
500 US$ ＝ 59534 PTS

ペセタが手に入ったので、プラド美術館に向かう。エル・グレコ、ゴヤ、ムリーリョなど何れも素晴らしいが、ベラスケスの腕は群を抜いているように思えた。（左図はプラド美術館前。似顔絵書きが大勢いた）
はじめてｂａｒなるものに入って軽く昼食を取る。ビールと野菜卵入りサンドイッチで５００PTS。

実は、今度の旅行は、マドリツドの観光バスによる市内観光（３時間）がパックされている。Ｊｕｌｉａ社のものでホテルに迎えに来てくれる。西、英両国語を話すガイドが付いて市内を回る。分かりやすい英語だった。
なかなか良かったが、最期に場末のみやげ物屋に押し込まれたのにはちょっとがっかりした。

夜、Ｙ氏ホテルに迎えに来る。町中からちょっと離れたところにあるバスク料理の専門店（Meson Texistl）で会食。
氏は、４０代半ばであり、同社ただ一人の日本人で有るばかりでなく、マドリッド日本人会（正確な名称？）の副会長なども兼任していてたいへん忙しいようであった。

昔、私がＴ社でＬＳＩ事業の責任者をしていた頃、氏は若手として海外の電卓事業構築に飛び回ってして、私の自宅にも来た事があったそうである。私の記憶には全く無いのだが、氏の所属していたグループの仕事の猛烈ぶりはものすごい物で、多分「夜討ち朝駆け」の類でＬＳＩ確保の為に押し掛けて来たのだったものと思われる。
昔話でだいぶ話がはずんだ。
今朝の換金の話をすると、そのような事務能率の悪さがスペインの大きな問題点の一つなのだとの事。但し、サンタンデール銀行はスペインの大きな銀行の一つでＴＩＳエスパニャ社の取引銀行なのだそうである。
同銀行会頭の娘が、バレステロス（ゴルファー）の奥さんであるとか、同ファミリーの一員がかってアルタミラの洞窟を発見したのであるのかという話をいろいろ伺った。
今回の私の旅の目的などをお話すると、明日夜の同社の会食会に同席を勧められた。スペイン人（英語が出来る）から直接生の情報を入手出来る可能性が大きいからである。

氏から１／５０万のロード・マツプ（スペイン各都市のﾎﾃﾙ､ﾚｽﾄﾗﾝのﾘｽﾄ付き）を頂く。これは大いに役に立った。
店までの行き帰りに、信号の見方、ロータリーの回り方等教わった。
一番日本と違うのは、交差点で従うべき信号が、交差点の先の信号では無く、手前横の運転手の目の高さにある信号である点である。ロータリーは、心配したほど難しくはなさそうである。
－－－

店に居る中に、午前零時になってしまい、ﾏﾄﾞﾘｯﾄﾞでフラメンコを見る事は出来なかった。セビーリャで見る事にしよう。

５月１１日（木）

朝、ホテルの食堂で横浜時代（今の横浜国大の前身）の同級生、田中君と出合う。奇遇である。奥さんとツァーに参加してポルトガルの方から来たのだそうである。

さらに不思議な話があるもので、帰国２日後やはり横浜の同級生伊勢君から電話があり、彼と奥さんが１３日に同じホテルに泊まっている事が解った。

同級生といっても総勢４０名弱のメンバーの内３名がここに集まるという事は、何か我々の年代がスペインに引かれる物が有る事を示しているのではないだろうか？

マドリッド空港でレンタカー返却。

Ⅲ.　セビーリャ

マドリッド発　11:30 IB-108　セビーリャ着　12:25

セビーリャ空港でレンタカー借りる。全くの新車。そこで本日宿泊のホテル Donya Maria （４星、日本で予約、当日セビーリャは混んでいてここしか？取れなかった）迄のルートを教えてくれるが全くの出鱈目。

数回トライしたが到着せず。変な袋小路に迷い込んだ所、地元の人が助手席に乗ってガイド、やっとたどりつく。一方交通ばかりの細い道をくねくねと曲がりやっとこられる所。始めてではとても無理。場所はヒラルダの塔からすぐの所。

ホテルに地下駐車場有り、ﾎﾃﾙの人にガイドされつつどうやら駐車場まで降りたものの（右のドアミラー壁に擦る）、柱が多く、所定の場所に納める事出来ず、見るに見かねてさっきの人が運転、もう一人現れて、車外から誘導、それでも納まるのに５分ほどを費やすという恐ろしい所だった（300PTSはずむ）。駐車場代 1500PTS と言う事だったが翌朝要求されなかった。

ホテル自体はこじんまりした良いホテルで場所も観光に非常に便利。受付嬢（当日と翌朝は違う人）は、いずれもしっかりした英会話力と事務能力有り。

カテドラルに入る。カテドラルは世界で３番目の大きさと言う。コロンブスの墓。その前で棺を担ぐ４人の王の巨大な像がある。かってのスペイン栄光の源である。ヒラルダの塔にも上る。いい運動になる。上からの眺めも良い。　（上左図はカテドラル前の広場）

アルカサルにも入る。イスラム教装飾の細かさ、美しさに驚く。（上右図はアルカサルの外観）

ただ、壁面いっぱいを埋め尽くした模様をじっと見ていると、イスラム教の中に空所恐怖症が有るのではないかと感じた。

（上左図はアルカサルの庭園）

受付嬢の推薦で、レストラン Becerrita （ホテルから歩いて３，４分）を予約してくれる。メインディッシュは　鯛のオーブン焼き（Besugo al horno ）で30cm 程度の鯛を一匹野菜と共に焼いた物。味は中国料理の鯉の丸揚げに近い。なかなか美味。ガスパーチョ（ここのガスパーチョはあまり頂けない事が後でわかった）、ワイン、コーヒーとで 5109PTS。

その後、タブラオ ″Los Gallos″（雄鶏たちと言う意味、これもホテルで予約、ここも歩いて３，４分）で、フラメンコ・ショウを見る(上右図)。素晴らしい。

(左図は夜のヒラルダの塔)

#62　95/ 6/28　　スペイン　ドライブ旅行記（３）
敏翁

５月１２日（金）

快晴。朝カテドラルの周りをビデオを持って散策。すると昨日出口だったところから、ぞろぞろ人が入っていく。私もそれにつれて入る。赤い衣を着た僧が十数人でミサをあげていた。参加者は５０人位か。ステンドグラスが朝日に輝いて美しい。早速撮影を始めたら監視人らしい人に止められてしまう。（後で再生してみたがあの時の華やかなイメージは全く出ていなかった）

外に出るとヒラルダの塔の鐘が鳴り響く。これは音も含めて良く撮れていた。

このような場所に泊まるのも気分がいいものである。但しレンタカーで泊まるには問題が多い。

チェック・アウト。昨日と違う人に車出して貰う（300PTS）。

Ⅳ.　コリア・デル・リオ

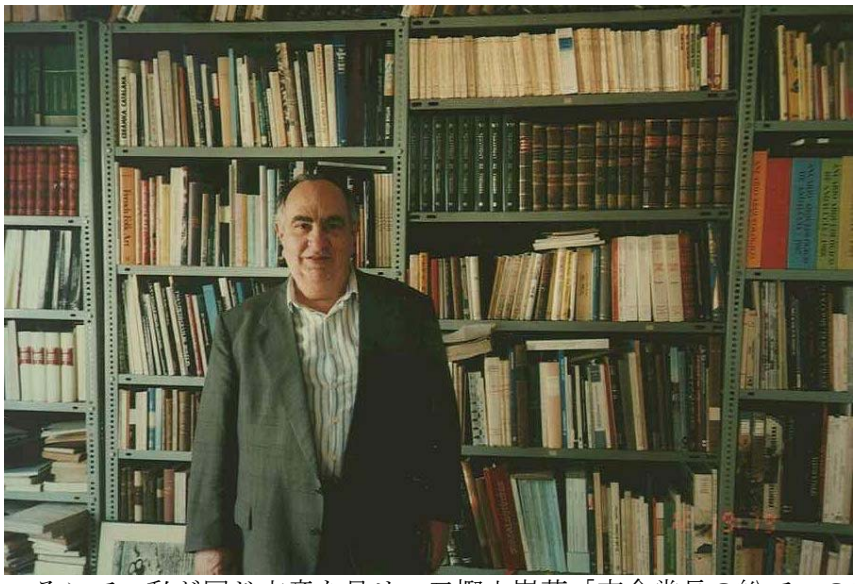
コリア・デル・リオに行き「ハポン」さんに逢う事にする。

セビーリャからコリア・デル・リオへは一本道。２０分ほどで着いてしまう。町中に入り、２，３聞いてみるが、<i>(*1)は無い。英語の話せる人もいないらしい。

これですっかり、調子が狂ってしまった。昨日まで、英語で殆ど困った事は無かったのに、２０分車を走らせると、全く英語は役に立たないとは。それで私のスペイン語の実力が実戦でいかに乏しいかが身にしみた。

一人の老人が、町役場に連れて行ってくれる。そこでハポンに会いたいのである。なぜならば私の祖先の一人もここに来ている可能性があるからです。（この文章だけは、私のスペイン語を日本でスペイン政府観光局の女性に添削したものを持って行ったのです）と言う文章を示すと、町役場の中年の男は英語を話せる男はいない。ハポンハウスに連れて行ったらどうか〈と話したらしい〉。さっきの老人も私もハポンであると言い身分証明書を見せてくれる。

そしてこの老人が「ハポンハウス」の主　Sr. Virginio M. Carvajal Japon の自転車店　Carvajal に連れて行ってくれる。老人はすぐ帰ってしまう。氏は５０？の恰幅の良い紳士。Japon が最後に付いているのは、氏の母親がJapon 姓である事を示している。（父親の姓は、Carvajal）



そこで、私が同じ文章を見せ、又樫山巌著「支倉常長の総て」の中のここが私の祖先と関係があるのだと言うような事を身ぶりも含めて言うと、私の家にいこうと言う。そこから歩いて２，３分の所にある彼の家は３階建ての家。その３階３間程が資料館の様になっている。その一つ一番大きなのは、２０畳程で一面が全面窓で道路に面した明るい部屋になっており、３面（入り口を除く）がぎっしり、文書、書籍の類で天井まで埋まっている**(上左図。書棚の前に立つハポン氏)**。見ると　逢坂剛著「ハポン追跡」や「支倉常長の総て」もみえる。高橋由貴彦著「ローマへの遠い旅」、大日本史料等はコピーで持っていた。日本語で出ている殆どの資料はここにあると見た。

又バチカン関係の資料などもコピーでかなり持っていて見せてくれたが、これは私には評価出来ない。記念写真を撮る。

また、いろいろな写真を見せてくれたが、それによると、１９９２年にコリア・デル・リオで日本人も参加してお祭（支倉常長がコリア・デル・リオに上陸したのは１６１４年だから半端なようにも思えるが）が行われ、グァダルキビール川畔に支倉常長の銅像が設置された（この時期は確認してはいない）と思われる。

しかも、彼は１９９３年１０月に仙台に行っている。そこでコリア・デル・リオのハポンと日本の関係者（支倉常長の後裔の人も出席している）間の交歓会（？）が開かれている。現在常長の墓と言われるものは宮城県に３つあるが、それらにもお参りしているらしい。

川崎町（宮城県柴田郡、大字支倉の地名のあるところ、現在樫山巌氏の住んでいるところ）にも行っている。支倉の円福寺にも常長の墓と言われるものがあるからです。

現在、彼はコリア・デル・リオのハポン協会の会長で、彼の今までの努力は大いに評価しなければならない。

しかし、かれは資料の意味を理解しているのかとなると問題が残る。

例えば、「ローマへの遠い旅」では、ハポンには全く触れていない(*2)と言う事を下手なスペイン語で言うと、彼はきょとんとし、そして奥付のところにprinted in Japan とあるところを指さしハポンとあるではないかと云うのである。

これをスペイン語で説明するのが大苦労。果たして解った事やら。

とにかく、あまり長居をしても、雰囲気がおかしくなりそうなので、そろそろ退散する事にする。コリア・デル・リオの地図（日本の町内会の地図みたいなもの。但し紙質はアート紙でカラー写真なども入っている。）を貰う。氏の自転車店も広告に入っていた。常長の銅像の位置も教えて貰った。

地図には１９９４と言う記載があるが、銅像は地図上には記されていなかった。

車を探し（ぐるぐる引き回されたので検討が付かなくなっていた。その為もあって地図をもらった）、それから銅像をさがす。川畔は公園のようになっていて、**支倉常長の銅像**は眺めの良いところに川に向かって立っていた。

銅像のコンクリート製の台がカラー・スプレイの落書きでひどく汚されているのが残念だった。
通りかがりの人に記念写真を撮ってもらう(前頁右図)。

そばのｂａｒでビールを飲み、気分を取り直して、一気にコルドバに飛ばす事にする。
来た道を戻り、Ｎ－Ⅳ　に入りコルドバまで頑張る（平均時速 120km/h、　走行距離 163km）。

－－－

次に、「歩き方」推薦の**灯火のキリスト広場(上左図)**へ行ってみる。
コロン広場の回りにに車を留める。有料だがやり方が解らない。うろうろしていると見回りの若い男が現れて、教えてくれる。25PTS を入れてボタンを押すとチケットが出てくる。これを車の前（勿論中）の見えるところに置いて置く。長い時間の場合、後でどうするのかは聞き取れず不明。
それから２回ほど道を尋ねて、「広場」に到達。赤い蝋燭を灯してお参りをしている人が居た。
観光の名所にもなっているらしく、馬車による観光客も訪れていた。しかしそんなに雰囲気の有るところではない。
夜にはどうなのか？

ホテルに戻り、ひと休み。ホテル推薦のレストラン　El Blason に行く。このレストランは、Ｙ氏にもらった資料でもかなり上位にランクされる店。確かに味は、想像を絶して素晴らしい。ガスパーチョの味もセビーリャとは段違い。なるほどこういう物かと納得。値段はたいした違いではない。5650PTS。

終わって町に出る。今日は土曜日。広場で「**美食大会**」が開かれ、数千人が集まり、食べたり、踊ったりしている。
(上右図)
テントがけの店（６畳から１０畳位、）の店が、Gastronomia（美食）　de XX と看板を出している。特徴は、その XX が各自治州（Andalucia,Galicia,Rioja,･･･）は勿論だが、Angentina,Mixico,Pelu,Cuba,･･･ Brasil まで入っている事である。こういう店が数十店各々特徴有る料理（例えばアルゼンチンではアサード）を出していた。
これから感じた事は民衆の意識の中では、スペイン語（ポルトガル語を含むのか）圏の仲間意識は強く残っており、又折に触れてそれを強化しようとする運動が行われ、また望まれていると言う事である。

そこから、ちょと歩くとホテル。周りは薄暗い。１０代の若者が数百人集まっている。女の多くはは身にぴったりの衣装（より正確な名称があるのだろうが）で、極端なまでに胸、腰の線を強調して男を挑発している（?）。
最近の日本の事情には疎いのだが、私の感覚では異常である。
ホテル受付嬢との会話。
小生　What kind of meeting ?
嬢　　笑って答えず
小生　Every saturday ?
嬢　　Oui（何でここで ｳｨ なのか）　meeting, meeeting, meeeeeting.
　　（いつもああなので閉口しているのよ　とでも言っているのか）
昨日と言い、今日と言い、毎日新しい発見がある。

#63　95/ 6/28　　**スペイン　ドライブ旅行記（４）　　敏翁**

５月１４日（日）

Ⅵ.　グラナダ

快晴。**グラナダ**に向かう。
コルドバからＮ－４３２を１６６ｋｍばかり走ればグラナダの町に着きます。アンダルシァの大地は広々と麦秋に輝き、走っていて実に気分の良いものでした。

何時でもそうですが、町に入ってからが一苦労です。下町らしい所に車を留め、そばのｂａｒに飛び込み親父に聞いても要領を得ません。どうやら地図の外に居るようです。歩いて３，４分の所にあるホテル（４星）に入り、地図を貰う。
コピーしたもので文字は殆ど読めない代物でしたが、地形などから何とか判読してアルハンブラに向かう。
町中から**アルハンブラ(上図)**へも入り方が難しいが、２，３回ぐるぐる回った末、どうやらたどりつく、道は大きな駐車場に突き当たる。男が整理しているらしく、その指示に従って駐車する。ところが駐車代が 2000PTS だという。
どうも引っかかったらしい。良く見ていると、大抵の車はその駐車場には入らずに、どんどん左のほうに（道は広くない）行き、適当なところに留めているらしかった。
そこから、アルハンブラの入り口までは５，６分も歩く必要がある。チケット・カウンターにある案内書で、綺麗な地図を貰う。
アルハンブラはいろいろ見所はあったが、ベラの塔から見るシェラ・ネバダの雪を頂いて輝く峰峰が一番だった。

駐車場に戻ってみると、先ほどの男は居ないようだ。もぐりの雲助整理人だったのかもしれない。

実は、昨日グラナダのホテルを予約済み。選択基準は３星クラスで、私の持っている簡単な地図にホテルと同じ通りの名前が出ているという簡単なものです。先ほど貰った地図と照らし合わせて、比較的容易にホテルにたどりつく。
ホテル　Condor　（３星）　地下の駐車場に駐車する。

夕方町に散歩に出る。観光地図にはない教会のまわりが人だかりがしているので中に入ってみる。その内部の装飾の過剰さは驚くべきもの。結婚式（？）をやっているらしい。参加者約２００人。牧師の祈りは日本の常識では著しく長く、何回も途中で唱和（５０人くらいはしていた）。後ろの方の人も皆敬虔な面もちである。そのうち全員が立ち上がって何かが始まる。ここで出る。
先ほど、裏町で見たレストランのメニューが気になり、そこに行こうとしている内に、道に迷う。それではホテルはこの方と思いこんで、しばらく歩き、場所を聞いてみると、地図のはずれぎりぎりのとんでもない所に居る事が解る。ようやくホテルに帰る。夕食どころではなくなり（ホテルにはレストラン無し）、ホテルのカフェテリアに行く。客は一人も居ない。ボーイはテレビに熱中している。食べ物は無いのかと聞くと、サンドイッチぐらいならという。ビールとハムサンドにする。

５月１５日（月）

快晴。今日は、「歩き方」に従って**【グアディクス】**（Guadix）に行ってから、ロルカゆかりの地を回る事にする。
ホテルで、グアディクスへ行くためＮ－３４２へ入り方を聞いたが、全然その通りに行かない。入り方は極めて複雑な様に見えた。しかしこれは教え方がまずいので、行先にムルシアを見たらどんどんそれを追って行けば良さそうな事が途中で解り、その考えで旨くいった。
グアディクスの町中に入るとすぐ〈i〉がある。しかし５／１５は休み。町の守護聖人（？） San Torcuato の祭日らしい。
クエバ集落（Cuevas とは洞窟と云う意味）を車で回って見る。確かに異様な風景である。今でも土中に住んでいる人が、ここにも、中国にも、トルコにも居るという事はどう理解すれば良いのだろうか？

町の人々は皆正装して教会の方に向かっているようである。
博物館も休み。そばでみやげを売っている男の誘いで男の家（博物館の隣）の中を見せて貰う。絵はがき３枚 150PTS のところ 300PTS 渡す。

ロルカ公園

Ｎ－３４２を戻り、**【ビスナル】**（Viznar）に入る。ロルカ公園分かりにくい。尋ねる事３回目の７０－８０代の木陰で休んでいた老人は、自分は目が悪くて駄目だがと通りがかりの男に「この人を《ガルシア・ロルカ》公園に連れて行ってやってくれ」（《》内しか聞き取れなかったが）と頼んでくれた。この４０代の男が助手席に乗って公園前までガイドしてくれる。（ビスナルからの細い道をしばらく走ると、左側にマンションらしいものがぽつんと立っていて、その斜め右前当たりに公園がある。）
道路から少し登ったところに公園の門があり、中は広場になっている。緩やかな斜面を削って広場にしたと思われるが、それで出来た壁（高さ２ｍ位）が石で固められ、そこにガルシア・ロルカの詩を焼き付けたセラミック板が７枚ほどはめこんであった。(上左図)
一例を示すと(上右図)

LA LUNA ViNO A LA FRAGUA	甘松（ﾅﾙﾄﾞ）のポリソン(@)を腰につけ
CON SU POLiSON DE NARDOS.	月が鍛冶場にやって来た。
EL NiNYO LA MiRA MiRA.	子供が月をじっと見る　じっと見る
EL NiNYO LA ESTA MiRANDO.	子供が月を見つめている。
EN EL AiRE CONMOViDO	月が　震える空気の中で
MUEVE LA LUNA SUS BRAZOS	その両腕を動かして、
Y ENSENYA, LUBRiCA Y PURA,	みだらに　そして清らかに、
SUS SENOS DE DURO ESTANYO.	固い錫の　乳房を見せる。
(ROMANCE DE LA LUNA,LUNA)	（月よ、月よのロマンセ）
文字の大小も実際に合わせた。	訳：小海永二

@：ポリソン・・・・・腰につけてスカートを拡げ、ふくらませる道具。
これは、ロルカの詩集の中でも傑作が多いと言われている「ジプシー歌集」の中の最初の詩である。上記セラミック板に記されているのは、「月よ、月よのロマンセ」全体の約５分の１である。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

公園の風景やセラミック板の写真を撮っていると、７０代の破れた麦わら帽子のだいぶやつれた男が現れた。ここよりもっと良いところがあるといって、記念碑の所に連れて行ってくれ写真を撮ってくれる（帰国後写っていない事判明、シャツターの押し方不十分、多分オートフォーカスのシャッターなど押した事が無かったのだろう）。別れるときに、車の中の物盗まれるから注意しろ、ガラスも割られるぞなどと注意してくれる。一見のどかに見えるこの当たりも治安は良くないのだろうか？　又はフランコ側だった人のロルカ公園を訪れる人への抗議としてその様な事があり、老人の記憶の中に残っていると言う事なのか？

尚、天本英世著「スペイン巡礼」１９８０、（株）話の特集　によると、天本さんが、１９７９年７月にここを訪れた時は、まだ公園は無かった様である。

ビスナルの町に戻り、ｂａｒで軽い昼食（ビール、小魚の酢漬け）。

Ｎ－３４２でグラナダを通り過ぎ、グラナダ空港の近く、**【フエンテ・バケロス】**（Fuente Vaqueros）の町に入る。ここはガルシア・ロルカが１８９８年6月５日生まれたところ。ここでも男（腕に入れ墨をした人相のあまり良くない男だったが）が親切に車の前に立って道案内してくれる。しかし記念館（生家がそうなっている）は月曜休みだった（「歩き方」にもﾁｬﾝとそう書いてある　私がうっかりしただけ）。男は日本人は好きだ、黒沢の映画は良いなどと言って握手して別れた。

グラナダ空港でレンタカー返す。走行距離：６０３ｋｍ

Ⅶ.　バルセロナ

グラナダ発　19:00　　AO-434　　バルセロナ着　20:10

空港でレンタカー借りる。空港〈i〉で地図とﾎﾃﾙまでの行き方を線引きしてもらう。簡単に行けそうだが実際は悪戦苦闘。
理由は、ホテル Montecarlo （３星）
が**ランブラス通り**にあるのだが、この通りの特徴を正確に理解していなかった事による。この通りは一方交通の細い道２本の間が細長い公園（？）の構造になっているもので、通りへの入り方に注意を要するのである。そんなに細い道とは全く思っていないものだから、何回聞いてトライしても通りに入れない。
たまたま走っていると警察があり、乗り付ける。英語の出来る者いない。しばらく粘っていると、パトロールから帰ってきたのか～２５才の女性警察官が現れ多少英語出来る。道を教えてくれたが、何となくおかしい。そばの４０がらみの男が詳し地図を持ってきて違うと言い出し二人で口論。その内男は腕を広げてみせて降りる。口では女にはかなわない。しかたなく、女の言うとおり走ったが、通りに入る事が出来ない。又１，２回道を聞いて走った後、自力でホテル到着はあきらめ、車を止め、目印を覚え（〈M〉の Liceu 駅）タクシーでホテルに行く。運転手は変な顔をして乗せてくれたが、３００ｍも走るとホテルの前。そばまできていたのである。
後から考えると、空港で貰った地図を充分研究しておけば、こんな事にはならなかった筈である。

５月１６日（火）

朝、この辺に銀行は有るかと聞くと、換金ならうちのホテルは有利だよとかいう。面倒なので 500$ 渡すと　ちょこちょこと計算して　5800PTS よこす。どうなっているのだと言うと、今度はプリンタ付きの計算機で計算してその紙をくれるが、５ｃｍ幅ぐらいの紙に 500$ と 5800PTS だけがプリントされたもの。実にいい加減。

今日から４日間、１９日まで、カタルーニャのロマネスク美術で有名な地点を出来るだけ訪れる予定である。

先ず今回期待していた**カタルーニャ美術館**について尋ねると、休んでいると言う。一部は見られるかも知れないが、確かではない。また今モンジュィックで自動車ショウが開かれていて、大幅な交通規制が牽かれているから、地下鉄（〈M〉）で行った方が良いと言う。
その通りにする。モンジュィックの丘正面は自動車ショウの飾り付けがあり、大変な人の群れと交通整理。それを右から大まわりに丘を上って行ったが、変だと思ったのは、カタルーニャ美術館の標識が全然現れないのです。
それでも行ってみると、やっぱり全館休館で、再開は多分今年末に成るだろうとの事でがっかり。
これも私が悪いので、「歩き方」最新版に再開と書いてあったのを確認（例えば例の政府観光局などで）しなかったのが悪かったのです。（尚、「歩き方」の ’93-’94版では休館になっている）。と言う事は’92からずっと休館と言う事なのか？一旦再開して又閉鎖したのか？

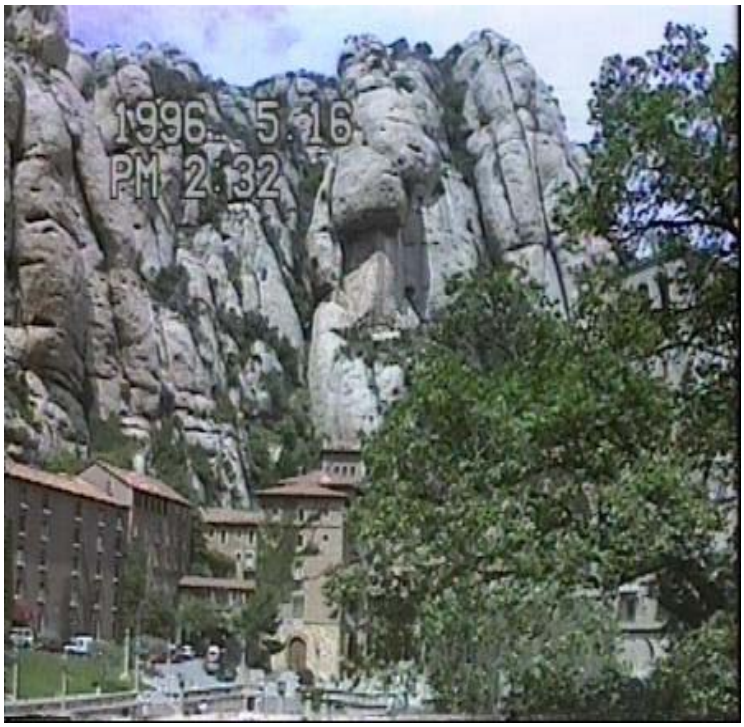
これは、あとで気がついた事ですが、ロマネスクの特に建造物は非常に壊れ易く、何処でも修理の大工事をやっている事です。それが異常に長い休館期間と関係があるのでしょうか？

何れにしても、今回のこれからが本当のロマネスク紀行だと言うのにしては誠にさいさきの悪い出発となりました。

丘をまた遠回りに降りてくる途中の気の重い事。他の美術館等見る気力も無くなり、ホテルから一気にモンセラットへ行く事としました。

#64　95/ 6/28　　スペイン　ドライブ旅行記（５）　　敏翁

Ⅷ.　モンセラット、カルドナ



Ａ－１８（これは有料）に乗り、【モンセラット】(左図*)に行く。途中から左側に不思議な形をした岩山が現れる。モンセラットまでは一本道で簡単。聖域に着くと途中にゲートがあり、切符をくれる。ここを通った車はどこに駐車しても良いが、帰りに時間にリンクして料金を支払うシステムのようである。先ず聖堂に行くと右側の入り口には列が出来でいる。これが例の「黒いマリア像」にお参りする列だなと並ぶ。３０分ぐらいかかってやっとマリヤ様（祭壇中央に祭ってあり、ガラスで覆われていた）にお目にかかる。そう云うと悪いが、あまり有り難い感じはしない。

再び、聖堂中央から入るときは丁度13:00頃、少年合唱団の賛美歌が聞けると云うので、聖堂内は満員。私も後ろの方で聞く事は出来た。約１０分で終わる。ちょっと物足りない。

ケーブルカーで山上に登る。まわりが殆ど例のニョキニョキ岩である。

日本だとすぐに　ｘｘ岩とか名前を付けるのだが、こちらではそのような標識にはお目にかからない。

*：*日時が白字で大きく入っている画像はビデオ撮影画像から静止画を採ったもの。*

カルドナ

ここから、本日の宿泊地【カルドナ】に向かう。

それには、マンレサ迄行きC-1410に乗れば良い。マンレサでＣに乗るとき、又２回ほど道を聞いたがほぼ順調に乗れた。

ドライブ途中で居眠りが出そうになり、ｂａｒに入る。名前もなんとEl Parador。主人若干英語が出来る。ここで昼飯にする。ビール中ジョッキ、野菜サラダと兎の腿肉の丸焼き（ガーリック・ソース味）。やっと野菜にありついた。兎も癖のある味だが美味。料金は､あとカフェオレ附きで主人が計算していくと 905PTS。900PTS で良いという。

本当のパラドールにはそこからすぐだった。

ここは、評判の良いパラドールの一つで、丘の上のカルドナ城の中に旨く納められている(上左図)。城の中にはサン・ビセンテ教会（１１世紀）もある。これは明朝１０時に中に入れる。

丘の下には岩塩を掘った残差がうず高く堆積されており、一部では今でも採掘が続いているようである。(上右図)

一回りして、風景をビデオに収め、それには満足したが、食欲の方が夜になっても全く出てこない。先ほどのサラダに入っていた相当量のオリーブの実とたっぷりかけたオリーブ油に「村山さん」*ではないが当たったのか？

*：*この年村山首相がイタリアで開かれたサミットで食中りでダウンし、食べつけないオリーブ油にあたったと噂された。*

５月１７日（水）

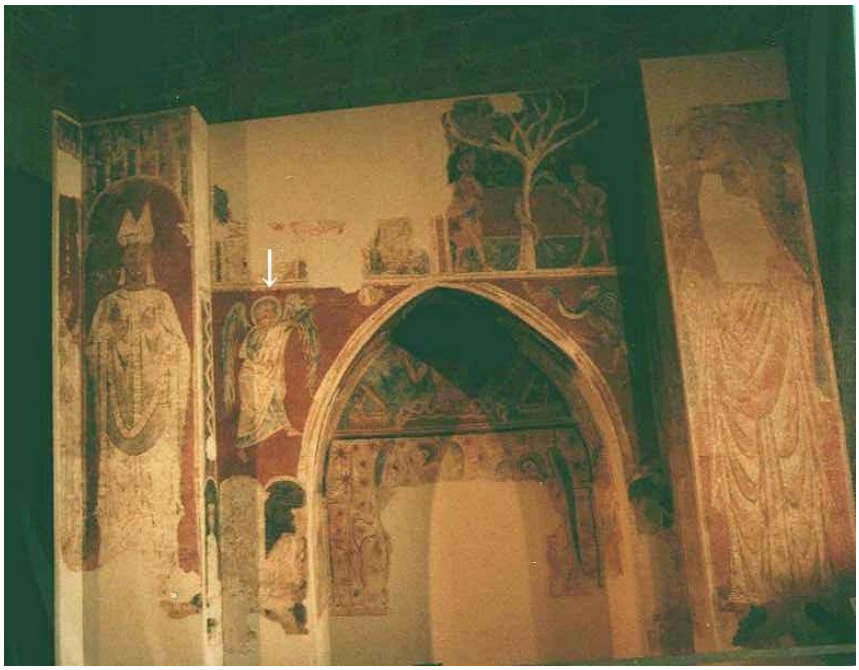
ここの朝飯(左図)は素晴らしい。４星のパラドールだが、普通の４星のホテルとは大違い。基本的にはバイキング形式だが、お湯は小柄の美人が持ってきてくれる。今までのホテルで出るソーセージは何か少し臭いが気になり、スペインはこんなものかと思っていたが、ここのはそんな事はなかった。

１０時迄待って、教会内拝見。お客は他にベルギー人老夫婦。説明を英語でしてくれたので助かった。内部は何の飾りもない簡素なものでそれなりのおもむきがある。

Ⅸ.　ソルソーナ、ビック

```
Ripoll            Figueres
                                        ◎−− |    |−−□
                                            |
            Olius          ____○ Berga     |
                o_____/        \            |
                /               \           |
        Solsona □                   −−□ Vic
            /  \
          /o    \
      El Miracle    □ Cardona
```

Ｃ－１４１０を北上すると間もなく**【ソルソーナ】**の町に入り、分かりやすい所に観光案内所（以下 <i>と略記する）がある。ここの中年の女性は英語が上手で親切。町の案内、次に行こうとしていたオリウスへの行き方も教えていれたが、**エル・ミラクル**に行く事を強く勧められた。それで若干戻り気味になるが、そこも行ってみる事にした。



カテドラルもなかなか良かったと思ったが、ここの**美術館**の収蔵物には、素晴らしいものがたくさん有ります。
有名な**「祈る人（Orante）」（上左図）**〔ｻﾝ･ｷﾙｾ･ﾄﾞ･ﾍﾟﾄﾞﾚ、10世紀〕、や**「天使」**〔ｻﾝ･ﾎﾟｳ･ﾃﾞ･ｶｾﾚｽ､13世紀〕**(上右図の白矢印)**等など。
昨日、カタルーニャ美術館を見られず、何か満たされなく感じていたものが、解放されたように思えました。

私の５０万分の1の地図では、ペドレは見あたりません。オランテの詳しい説明、やペドレまで訪れた印象などは、林ふじ子さんの本にあります。

エル・ミラクル、オリウス

【エル・ミラクル】

聖堂の祭壇(左図)はごてごて金ぴかで、マリア像が祭って有る。中高年のおば様達が大型観光バスで大勢来ていた。聖堂の隅に写真や小さな子供の義足（？）等がたくさん奉納されていた。四国八十八カ所に感じが似ている。

四国では、足の悪い人が、願をかけ、治ったお礼に義足を奉納することが行われている。小さな義足の意味は？

聖堂入り口に、エル・ミラクルの説明パンフレットがあったので、貰ってくる。後で辞書でも引きながら由来など研究しようとホテルで読み出すと、どうもカタラン語らしく断念する。それで未だに良く解らないが、地元では広く信仰を集めているのであろう。何しろ〈i〉の女性があんなに熱心に訪れる事を勧めてくれたのだから。

もっとも、ロマネスク美術とは関係なく、そちら関係の本等には全く出てこないようである。

【オリウス】　本当の田舎の村。小さな教会の前で若者が作業中。私が車を留めると、若者は大声で鍵番の老人を呼ぶ。客は私の２，３分後に着いたスペイン人夫婦と３人。中に入り、老人は、プレロマネスクの部分と後から追加された部分の謂れ等（？）について熱弁を振るったが、さっぱり解らない。もしかするとカタラン語なのか(＊＊)？　ときどき男の客が単語を区切って私に説明してくれる。資料（#）によると、「１１世紀のもので、ロンバルト（Lombard）・ロマネスク形式の顕著な例である」とある。

終わったとき、お礼のつもりで 200PTS 渡したが、老人の顔つきから察すると足りなかったのかも知れない。

すぐそばにある大岩（直径２０ｍもあろうか）に穴をくり抜いて墓地とした所を夫婦と一緒に見る。後で資料（#）を見るとアール・ヌーボー形式だとあったが、私の頭の中にある常識とはどうもあわない。アール・ヌーボーには日本には紹介されていない（？）だけでこんなものも有ったのだろうか？

リポール、またはビックで一泊を考えていたのだが、ビックに足を伸ばす事とした（ここからはビックの方が遠い）。
その方が後のスケジュールが建て易いからである。

ビック

ﾍﾞﾙｶﾞ まで C-149（相当な山道）、そこから ﾏﾝﾚｰｻ 方向に C-1411 で少し南下後、C-154 で【ビック】に入る。

ここは相当大きな町で〈i〉がすぐ解るというわけにはいかない。車を大きな教会（これがカテドラルであった）の前に留め、探しに行く。警察に飛び込む。若い警察官が地図を書いてくれる。〈i〉は Plaza Major （大広場、実際はカタラン語で z の字は c の下にひげの有る文字である）の隅にある。ここで若い男（英語出来る）にホテルを尋ねる。目の前のホテル Ausa （２星）が良いという。そこで予約したが、受付は英語駄目で、ただそばに駐車は出来ないと言う。困って、また〈i〉に相談する。彼はメモ用紙に

Ｍｒ．ｘｘ（ホテルの主人の名前）　この客の駐車の面倒を見て貰いたい　Ｐｅｐｅ（この若者の愛称）

と書いてくれた。（英語などでわかる）

私は車を駐車禁止の 広場（Plaza）に乗り入れ（すぐにパトカーに見つかったが、メモを見せて見逃してもらう）る。　主人はどこかに駐車するため、私の車に乗って行った。

ホテルの少年と仲良しになり（いろいろあったが省略）、レストランを紹介して貰う。　El Jardinet 。
ワインは大瓶しかないという。飲み過ぎた。

－－－

＃ ： ５月１８日フィゲラスの〈i〉でもらった資料による。この資料については後で少し詳しく述べる予定です。

５月１８日（木）

朝散歩しながら**美術館**の開館（10:00）を待つ。９時過ぎカテドラルに入る。ここの内部の印象は強烈だ。すべての壁面におどろおどろしい人間達がのたうちまわつている絵が白黒で描かれている。村田栄一氏の本によると、これは、カタルーニャの画家ホセ・マリア・セルトが１９２６年から３０年にかけて描いたものだそうである。

１０時を待って美術館に入る。ここは見られなかったバルセロナのカタルーニャ美術館に次ぐカタルーニャ・ロマネスク美術の宝庫だそうである。

全く素晴らしい。ここには沢山の木彫りのキリスト磔刑像、子供を抱いたマリア像があり、いずれもロマネスクのものは、キリストなど信じてはいない私にでも素直に受け入れるものを持っているのである。(上図)

ここには、ゴチックのものも良いものが沢山有り、ロマネスクとの違いの大きさに驚く。この時民衆の心はどのように変わって行ったのであろうか？

その他、２階にはセラミック、銀器なども大量に展示してあった。

#65　95/ 6/28　　スペイン　ドライブ旅行記（６）　　敏翁

Ｘ．リポール、フィゲラス

ビックから【リポール】までは、Ｎ－１５２に乗り北上すればすぐ（３８ｋｍ）である。町中に入り、適当な広場に車を留め、〈i〉を探す。中年の女性の親切な案内ですぐ解った。

〈i〉には英語のわかるものはいない。地図の他には資料は無さそう。そばに美術館とカテドラルがある。ここまで、車を運ぼうと戻りエンジンをかけるがかからない。こんな経験が無いものだからすっかりあわてる。いろいろ試みたが（ルノーの現地支所に電話をしても昼休みのせいかかからない等など）、また警察のお世話になる事にした。〈i〉のそばに派出所（？）が有り（これを見つけるのも苦労したが）、話したところ若い警官がパトカー（私も同乗）で、私の車の所まで来てくれる。彼のアドバイスで、ハンドルをガタガタさせながら、キイを回すと難なくエンジンはかかった。こんな事は誰でも知っている事なのだろうが、私は知らなかった。

もっとも、その後今回の旅行中に、同様の現象があと２回起こっている。その１回は、人里離れた所。ここで起こって勉強した事は天の助けか。また、私の車（日本）では起こった事が無いのだが、一般にはどうなのだろうか？

何れにしても、これで２時間ばかり時間を消費しまったので、リポールは美術館（ここにはロマネスク美術は無い）、カテドラル（大修理中だった）を早々にまわり、ｂａｒで昼食をとり（ビール、小鰯のオーブン焼き、小魚の酢漬け、カフェオレで 1100PTS なかなか良かった）、フィゲラス迄行って泊まる事にした。**（上図はカドラルの回廊）**

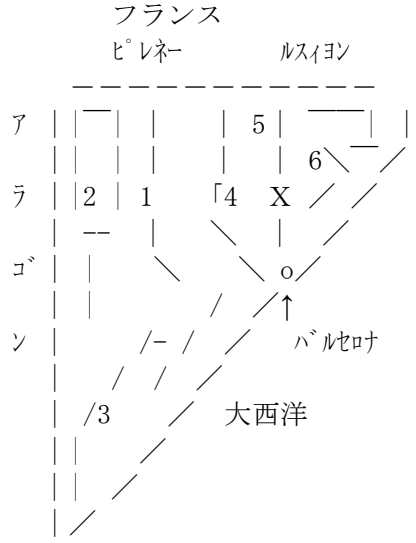
【フィゲラス】迄は、Ｃ－１５０、Ｎ－２６０と乗り継いで、相当な山道もあり、距離も結構有る。
（７８ｋｍ）　順調にフィゲラスの町に入る。ダリ美術館のまわりはものすごい駐車で車を留める所がない。少し離れた所に車を留め、〈i〉を探す。これも比較的順調に見つかり、ここでホテルの予約をする。そこから歩いて行けるところ。

ＨＯＴＥＬ　Duran　（３星）

チェック・インしたが、駐車場は全然違うところで少し面食らった。
再び〈i〉に赴き、明日のスケジュール等いろいろ相談をする。相手は小柄の美人で英語が上手。私がロマネスク美術に関心が深い事を知ると、奥の部屋でごそごそ探していたと思ったら、一つの資料（#）を探し出して私にくれた。

----------　資料（#）の紹介　----------

英文、Ａ３版１６ページアート紙カラーのこの資料（#）は ″Discovering Romanesque art in Catalonia″ と題するもので、実用的な案内書としては実に良く出来ているものだと思う。それで以下簡単に内容を紹介する。
カタルーニャには、１９００にも及ぶのロマネスク教会と、約２００のロマネスクの特徴を持った城や武装された館がある。その中の約１５０を６つのルートに分けて訪れる事を勧めている。



上図はカタルーニャと６つのルートを模式的に示したものです。

ルート１　アンドーラとの境からウルヘル、セグレ谷を通り、イグアラダ近くの　La Tossa de Montbui に 到るルート。　２１の見るべき建造物のある地点。　〈i〉は４ヶ所にある。
ルート２　アラン谷（Vall d'Aran）から Vielha トンネルまたは Sort 経由 Lleida に到るルート。３５の 地点。〈i〉は６ヶ所にある。
ルート３　Daurada 海岸に沿ったルート。１９の地点。　〈i〉は１８。
このルートは、シトー派と聖堂騎士団の影響が強い。
ルート４　仏国境沿いの Cerdanya から Llobregat 及び Cardener 谷を通り、バルセロナ地域に到るルート。
私の今回回ったモンセラット、カルドナ、ソルソーナ、オリウスはこのルートに含まれる。２５の地点。

〈i〉は７ヶ所にある。

ルート５　ピレネー（アレス峠）からリポール、ビック、テラツサを通り、バルセロナに到るルート。２５の地点。　〈i〉は６ヶ所にある。

ルート６　Brava海岸に沿ったルート。フィゲラス、オロット、ジローナを通る。明日行く予定の Sant Pere de Rodes はこのルートの中。２３の地点。　〈i〉は２０ヶ所にある。

ルート４，５，６はフランスのルスィヨン（Roussillon）地方と密接な関係がある。

約１５０に及ぶ重要な地点については、それぞれ簡単な説明が付いている。その中から出来るだけ短い文例として、オリウスの例を示してみる。

【Olius】 Parish charch of Sant Esteve d'O.(11th C.),remarkable example of Lombard Romanesque style　:nave,semi-circular apse with characteristic decoration,beautiful crypt(same size as channel)with 3 small aisles and 6 colums(the stairs,ironwork and bell tower are 16th C.). Interesting Art Nouveau cemetry nearby.

又この地方には大きな美術館が６つある。

１）	バルセロナ	Museu d'Art de Catalunya	（カタルーニャ美術館）
２）	ジローナ	Museu Capitular de la Catedral	
３）	〃	Museu d'Art de Girona	
４）	ウルヘル	Museu Diocesa d'Urgell	
５）	ソルソーナ	Museu Diocesa i Comarcal	昨日見た所
６）	ビック	Museu Arqueologic-Artistic Episcopal	今日見た所

この６つの美術館の簡単な紹介もある。

----------　紹介終わり　----------

と言うわけで、明日はジローナで美術館 ２），３）を見よう。

元気が出てきたので、ホテルのレストランで夕食をきっちり取る。

緑が食べたいと言ったら勧めてくれたのが、芽キャベツをスライスしてオリーブ油で炒めたもの、大皿にいっぱい。次は Sopa de Pescado Costa Brava （ブラバ海岸で採れた魚のスープ）、ブイヤベーズ的なもの。素晴らしい。
最期はバレンシャ風パェーリャ。ちょっと私には味が濃すぎた。＋白ワイン。食べ過ぎ、飲み過ぎである。

５月１９日（金）

ＸＩ．　ジローナ、バルセロナ

サン・ペレ・デ・ローダ

フィゲラスのホテルを8:40 に出発する。

ダリにも全く興味が無い訳ではないが、ダリ美術館の開館が 10:00 と言う事で、スケジュール上諦め、Ｎ－２６０を東進【サン・ペレ・デ・ローダ】（Sant Pere de Rodes）に向かう。途中から段々細い道に入って行き２回ほど道を間違ったが、10:00頃到着する。

(左図)

ここは、建物自体の重要性と、クレウス（Creus）岬の山上にあり、リオンス(Lions）湾を見おろす風景絶雅な所にある事からカタルニーニャで最も有名な場所の一つである。少し手前に車を留め、野鳥の声に包まれながら歩いていくと、左下には青い海が広がり、手前には趣のある建物が待っている。実に良い気持ちである。

しかし、修道院（11世紀のものと言われている）それ自体は全く無惨な廃虚である。中に入るとその傷み具合は

更にひどいものがある。大修理工事中であった。今の状態を保つだけでもしょっちゅう工事が必要に成っているのではないだろうか？

ここから、フィゲラス経由一気に**【ジローナ】**（Girona ： これはカタラン語、標準語ではヘローナ(Gerona)）に向かう。約１００ｋｍ。ここは簡単に〈i〉が見つかり、地図を貰う。カテドラルは、花で飾られていて、他のところより印象が温かい。カテドラル内**宝物館**（前報の　2））に入る。いろいろ有ったが、印象に残るのは有名な「天地創造のタペストリー」である。これだけ小別室に納まっている。
次ぎに　**Museo d'Art de Girona**　（前報の 3)。カテドラルの隣）に入る。ここは「歩き方」、や村田氏の本でも触れていないが、非常に大きく（６階建て）内容も充実している。有名なものでは Biga de Cruilles（Crui の ｉ は実際は点が二つ有る。訳せないが、修道僧たちの行列している絵である）。
ロマネスクから現代美術まで幅広い展示がしてあるが、ロマネスクのものではいわゆるマヘスタ（栄光の像：Christ in Majesty on the Cross）が沢山展示してあり印象深いものがあります。

他に回教徒浴場（Banys Arabs）も見る。

若干時間が出来そうなので、バルセロナまで有料道路（Autopis）を使い、１４０ｋｍ／ｈ（私の車の限界）でぶっとばす。しかしこの私を＞１８０ｋｍ／ｈですいすい抜いて行くものも結構居る。
折角バルセロナに来たのだから、**サグラダ・ファミリア**ぐらい見て置かなくてはと思い、そばに駐車。３０分ほどまわりを散歩ビデオ撮影などする。

バルセロナ空港でレンタカー返却。

ＸⅡ．　パンプローナ、ハカ、サングエサ

バルセロナ発　18:25　AO-741　　パンプローナ着　19:15
パンプローナ空港でレンタカー借りる。
ホテル　Maisonnave　（４星、これも日本で予約したもの）の場所も細い一方交通の道に面していて、うまくアクセス出来なかった。又親切な男に会い助手席に乗って貰ってたどり着いた。ここの駐車場はそこから少し離れたところにある地域共通の地下駐車場。ホテルの男は簡単だと云うばかりでサービス悪く心配なので、一旦歩いて行って状況査察後、どうやらうまく駐車できた。
夜町に出る。ホテルのそばの広場（Plaza San Francisco）ではロック（？）大会。若者達は踊りだしている。そのそばの裏通りのｂａｒはどこも１０代～２０代前半の男女で溢れてむんむんしている。とても入れるものではない。はやってはいそうだが、客層が４０代以上と云う所をやっと見つけて入る。ビール、自家製サラダ、グラス・ワインを頼んだ。サラダは大皿にトマトが山盛り、卵、烏賊の輪切り、ｵﾘｰﾌﾞの実入り。パンと一緒で結構腹いっぱいになった。860PTS。

#66　95/ 6/28　　スペイン　ドライブ旅行記（７）
敏翁

５月２０日（土）

朝散歩。〈i〉の位置確認。**闘牛場**のそばにあった。 10:00 オープンと言う事で少し時間があり、歩き回る。闘牛場の牛の追い込み口のそばに、**ヘミングウェイの銅像**がある。パンプローナにとって彼は「陽はまた昇る」によってサン・フェルミン祭を初めて世界に紹介してくれた恩人になる。碑文の中に彼を amigo de Pamplona とか表現してあった。**(前頁図)**
ちょっと寒くなり、ホテルに戻ってセーターを着込む。
〈i〉の中年の女性は英語が出来、親切で色々な資料を貰う。その中にサンチャゴ巡礼に関する資料があり、これは大いに役にたった。それは、"EL CAMINO DE SANTIAGO -- The Pilgrims' Way to Santiago "　と題した横１

０ｃｍ、縦２１ｃｍ、４０ページ程の英文の小冊子である。
内容は、起源、簡単な地図から道順に従って主な訪れるべきポイントを要領良く示したものである。各頁には小さいけれどもカラー写真も２枚程度入っていて、簡単過ぎる点はあるが、良い案内書になっている。

---------- サンチャゴ巡礼路 ----------

ここで、サンチャゴ巡礼路について、簡単に触れたい。
下図は、French Road と呼ばれるサンチャゴ巡礼路のスペイン内の部分に対する概念図である。

```
                                   ﾌﾗﾝｽ

                 ｲﾊﾞﾆｪﾀ峠 ^^ ||^^^^^^^^^^ ||^^ｿﾝﾎﾟﾙﾄ峠
                              □           □
                 ﾛﾝｾｽﾊﾞｰｼﾞｪｽ ○            ||
                              ||           ||
                     ﾊﾟﾝﾌﾟﾛｰﾅ ○           ○ ﾊｰｶ
□=====○======○======○===○==
ｻﾝﾁｬｺﾞ  ﾚｵﾝ      ﾌﾞﾙｺﾞｽ  ﾌﾟｴﾝﾃ･ﾗ･ﾚｲﾅ  ｻﾝｸﾞｪｯｻ
```

フランスに起点のある主な４つのルートの内、パリ、ヴェズレー及びル・ピュイを起点とする３本のルートは、仏西国境に横たわるピレネー山脈・北麓のオスタバで一本にまとまり、イバニェタ峠（昔はシーズ峠と言った）でピレネーを越える。
又、アルルを起点とするルートはソンポルト峠でピレネーを越える。
こうしてまとまったスペイン内の２本の道は、ﾌﾟｴﾝﾃ･ﾗ･ﾚｲﾅ で一本になり、目的地サンチャゴ・デ・コンポステーラに到っている。

サンチャゴ巡礼路には、他のルートもあるが、上述のルートが最も有名で、私も、このルートを（車ではあるが）出来るだけ忠実に辿りたいと思う。

又、ナバラ全体の地図（１／４０万）を貰う。これも役にたった。
ただ、これから行く所の〈i〉の情報を聞いたところ、ハーカには無い。このまわりには無いと断言する。これは全然間違いだった。このあたりが現〈i〉システムの問題点だろう。
先ず、カテドラル、立派である。その中に美術館がある筈なのだが、教会関係らしい人に、 Por favor と問いかけただけで、手を振って今日は無いよとそっけない。ホテルの人と云い、〈i〉の女性（親切な人だったが）と云いどうもどっかナバラの人間はおかしな所があるのではないか？
これは、１２世紀のフランスの行脚僧エムリー・ピコーの「巡礼の案内」（最古の案内記）の「ナバラやバスクの人はろくでなしである」との記述に私が影響を受けた為に生じた偏見か？

本日は、ソンポルト峠近くのハーカ迄逆行し、戻ってくる予定である。その部分を拡大して下図に示す。

```
                          Leyre
                            o        N-240
Pamplona  □－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－○ Jaca
                     |    o Javier
          Sanguesa ◎                          o Sant Juan de
                                                la Penya
```

Ｎ－２４０を走り、先ず**【レイレ修道院】**を訪ねる。丘の上にあり、眼下にひろがるイエサ（Yesa）の貯水池にはウィンド・サーフィンも走っている。ここも眺めの非常に良いところである。ここのシステムは変わっている。
150PTSで鍵を２つ渡される。１つはカテドラルの扉の鍵、２つ目はその中の照明のため（５分間だけ点灯）というものである。内部（１１～１４世紀）は簡素な静寂さに満ちている。ここでは、クリプト（地下祭室、１１世紀）

も見物である。

ハビエル城

次にここから近い**【ハビエル】城**（フランシスコ・ザビエルの生地）**(左図)**を訪れて驚いた。

ここの訪問記はいくつかあるが、司馬遼太郎「街道をゆく　２２　南蛮の道　Ｉ」が一番良く読まれているだろう。その印象は田舎の寂れたところにある鄙びた城と、そのそばにある粗末なホテルといったもの。

私もそんな心づもりで到着してみると、大型バス数十台、と自家用車群で、車を留めるところもない。小学校の生徒も多く、キャーキャーと走り回り、土産もの屋に群がっている。多分３０００人以上集まっているのであろう。

ホテルも３星クラスのしっかりしたものの様に見えた。少し離れた所に駐車したが、剰りの人ごみにあきれ、城の写真だけ撮る。こじんまりした城だったが、櫓の上にナバラの旗（？）を翻し、周囲を睨んでいるように堂々と聳えていた。

ｂａｒでビールを呑み、ハーカに向かう。

実は、ハーカの近くのサン・ファン・デ・ラ・ペーニャへの行き方が解らないため、ハカ（アラゴン）で聞こうとしたのです。今朝貰った地図は、ナバラ地方だけ詳しくてで、アラゴン地方になると紙の上では該地も有る筈なのに省略が多く、出ていないのである。

【ハーカ】の町にはいると、ちゃんと〈i〉は有った。（私は初めから有る筈だと睨んでいたが）

しかし、17:00 迄昼休みとは予想が出来なかった。仕方無しに町の中を走っていて、サン・ファン・・・の標識を発見。それにつれて山道（相当なもの）をドライブ。

サン・ファン・デ・ラ・ペーニャ

サン・ファン・デ・ラ・ペーニャは、岩が覆いかぶさった所に教会がある異様な風景で有名。

廃虚になっている修道院の横の急斜面を注意して下る。車にチェンを巻く標識や、Hielo（氷）と云う標識がある。きっと冬は急斜面が凍結して危険なのだろう。

教会の一部は岩を削って岩の中に作られている。３方が岩で閉じこめられている**回廊**（Cloister）の柱と柱頭（Capital）は有名**(上左図)**。

下ってきた道を戻らずに、そのまま進むと、展望の開けた所に出る。残雪を頂き輝いている**ピレネーの山々**が視界一杯に連なり、素晴らしい。**(前頁右図)**

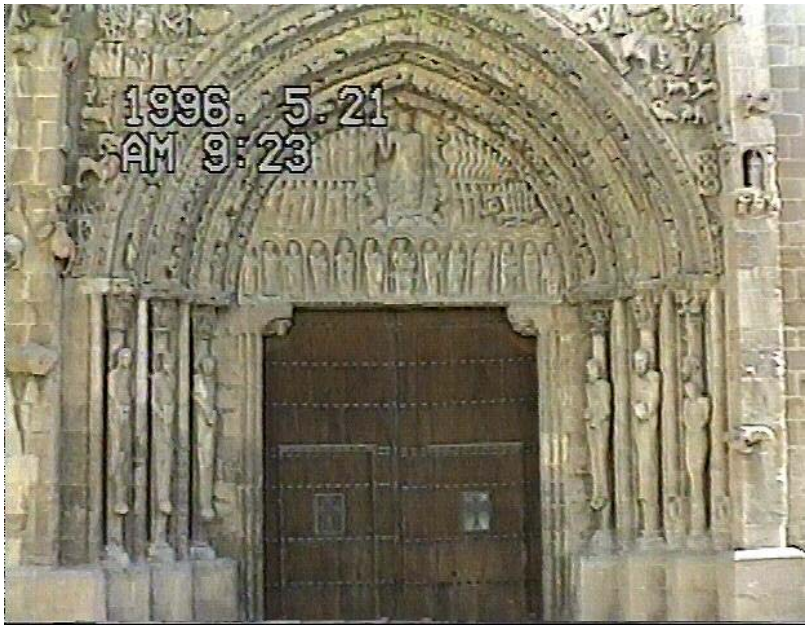
やがてＮ－２４０に戻る。時間と疲労の具合を考えて、今日はサングエサに泊まる事にする。

【サングエサ】の〈i〉は簡単に見つかる（ここにもちゃんと〈i〉はあり、しかもここはナバラである。今朝

のおばさんは本当に知らないのだろうか？）

英語が出来る若い女性がいた。カテドラルで19:30からミサがあるという。疲れが溜まり、出席出来なかった。
ホテル　Yamaguchi（２星）　を紹介してくれる。貰った地図に出ているホテルはこれだけである。電話の必要なく直接行けば良いという。
ホテル　Yamaguchi については、前述の司馬さんの本に詳しい。初代の経営者が、ザビエルが居た事のある大内氏の首都山口にちなんだ屋号で１９６０年にオープンしたが、３年後には失敗して閉め、５年たって再開したものだという。（ホテルの前の道は真っ直ぐにハビエルに通じている）
私も、翌朝チェック・アウトの時、日本との関係について聞いてみたが、従業員の意識の中には日本は全く無く、あれは ﾔﾏｸﾞﾁ でうちは ﾔﾏｸﾞｯﾁｨ　だと云うような事を言う。（もっともスペイン語なので確かではない）。
計算書を貰って、良く見ると屋号が Yamaguchy になっている。１９９３年に書かれた案内書（レオンで入手。内容についてはそのところで詳述）ではYamaguchi となっているのだが。その後再び経営が変わったのか？

とにかく、ホテルには日本語は勿論だが、英語が出来る者も全く居ない。疲れたので、夕食はホテルでとることにした。Menu del dia （定食）1300PTS を頼む。３０位の女性が対応してくれたが、その内容を紙に書いてくれる。野菜、魚、白ワインを選択。野菜は数種類（芽キャベツは解ったが、あとは日本の蕗に似たもの等不明）をオリーブ油を利かして煮込んだものを大皿に盛ったもの。魚はメルルーサ一切れとアサリ数個を薄味に煮て、パセリを散らしたもの（これにも相当オリーブ油が入っている）。味は大した事はなかったが、まあまあだった。
他にも１０人ほど客有り。私からちょと離れた円卓で会食を始めたが、そのにぎやかな事。各人身ぶり、手振りを交えながら、隣／対面を問わず、相手を捕まえては会話を始める。
さっきの女性一人でサービス。感心したのは非常に速く歩く事。今までこんなに速く歩く女性を見た事がない。姿勢も良く、愛敬もある。（但し美人ではない。）これも一つの文化なのだろう。



#67　95/ 6/28　　スペイン　ドライブ旅行記（８）　　敏翁

５月２１日（日）

ホテル Yamaguchy を出て、サンタ・マリア教会を訪れる。中に入れないが、ここは南側のフアサードが有名である。
(左図)

ＸⅢ.　ロンセスバージェス、プエンタ・ラ・レイナ、ロス・アルコス

本日の行程を下図に
模式的に示す。

O Valcarlos
|
O Puerto de Ibanyeta
|
O Roncesvalles

```
                                  |
                                  o  Burguete
                                 / \
                        N-135 /    |
                             /     o  Aoiz
                        ○Pamplona  |
                   N-111 /         □ Sanguesa
Los Arcos            /
    ◎－－○－－○ Puente la Reina
        Estella
```

サングエサよりＮ－２４０を少し戻り、Ｎ－１５０に右折 Aoiz を目指す。Aoiz を過ぎＮ－１７２に入ると本当の山道。途中は深山の趣がある。

渓流ウロビ（Urrobi）川をジグザグに渡りながら進む。ここは鱒釣りの名所らしい。やがて【ブルゲーテ】を通る少し手前でＮ－１３５に入る。ブルゲーテはヘミングウェイが鱒釣りをした事で有名になった所。（陽はまた昇る）

快調に走っていた車が、**【ロンセスバージェス】**に差し掛かる頃、突然現れた大群衆に遮られて動かなくなる。当地の教会の何かお祭でも有るのだろうか。とにかく車道に人（老人が多い）が一杯になってしまっているのだからどうにもならない。駐車出来そうな所は全部車で一杯。やむを得ず、ここの教会をパスして（通過に３０分ほどかかった）、**【イバニェタ峠】**の最高点（1057m）からさらに下って、フランス国境に近い**【バルカルロス】**に到る。これはカルロスの谷という意味で、カール大帝の軍がロンセスバージェス（フランス語ではロンスボー）の戦いで敗れた後、野営をした所として知られている。ここまで来ると観光客は殆ど居ない。ｂａｒでビールで一息。初めて歩いて巡礼をしている男（大きなリュックサックを背負った髭もじゃの男）を見る。

ここの教会（サンチャゴ教会）に入ってみる。祭壇正面にマタモロス（モロー人殺し）のサンチャゴ（聖ヤコブ）像（彩色、馬に乗り、剣を振り上げている）が祭ってある。ミサが終わり、私の車もこの人達で包まれてしまったが、人たちの実に穏やかな顔つきに感動する。

道を引き返し、イバニュタで風景を眺める。ここには、**ローラン**の歌で有名な英雄ローランを記念した**ローランの碑(上左図)**があり、又小さな教会が建っている。ローランの歌については、司馬さんの本も、村田さんの本も触れている。たしか堀田善衛の本にもあったと思う。真実は、ローランはイスラム軍に殺されたのではなくて、バスク人に殺されたのである。

ロンセスバージェスのあたりは、群衆は消えたが、駐車はまだ困難なようなので、ここは結局パスして、パンプローナは通り抜け、Ｎ－１１１に入り**【プエンテ・ラ・レイナ】(上右図)**（王妃の橋という意味）に向かう。

ここは、前にも述べたが、ｿﾝﾎﾟﾙﾄ（Somport）峠-->ﾊｶｰ-->ｻﾝｸﾞｴｻｰ-->ﾌﾟｴﾝﾃ･ﾗ･ﾚｲﾅ というルートが、ｲﾊﾞﾆｪﾀ峠-->ﾊﾟﾝﾌﾟﾛｰﾅｰ-->ﾌﾟｴﾝﾃ･ﾗ･ﾚｲﾅ ルートと合流する場所であり、又美しい橋（１１世紀にサンチョ□王の妃ドニャ・マヨールによって作られた）で有名。現在車はこれに平行してかかっている新しい橋を通る様になっている。

ここからは、サンチャゴ・デ・コンポステーラまで、一本のサンチャゴへの道（Camino de Santiago, The French Road）が通っている。<i> は日曜で休み。

Crucifijo 教会、サンチャゴ教会から中世の趣が残っているような巡礼路を歩き、橋を渡ってみる。川には赤い小さな鯉が沢山放されていた。暗い顔の男が、一人黙然と橋の上からパンをちぎって落としていた。

Ｎ－１１１を一走りで**【エステージャ】**に到る。ここも〈i〉は休み。
地図は無いし、検討がつかない。〈i〉のそばの教会（San Pedro de la Rua）に行くが、拝観したい人は〈i〉に行く事という張り紙があり、どうにもならない。たまたまそばにいた観光客らしい夫婦者に多少の情報をもらう。情報元は、彼らの持っていたミシュラン・グリーン。
そういえば、ミシュラン・グリーンを片手に回っている観光客が非常に多いようだ。私も日本の丸善で、実物を眺めたが、その時の印象では、大きさも「歩き方」と同じ位だし、大した事無しと求めなかった。やはり、ｺﾝﾊﾟｸﾄに必要情報を詰め込んであると言う点では、良い点が多く、持ってくるべきだった。

エステージャを早々に切り上げて、Ｎ－１１１を更に進む。右手丘の上に大きな教会が見えてくる。パンプローナで貰った地図によると、Basilicae San Gregorio Ostiense らしい。【ロス・アルコス】でＮ－１１１を外れどんどん細い道、ついには車一台しか通れない山道を登っていく。
丘の上の広場に到達して驚いた。大勢の人が車で来てピクニックをしている。バーベキュー大会をしている者有り、持ってきたご馳走を広げてパーティーをしている者有りだ。教会の前に、長さ３，４０ｍの長屋風（と言っても石造り）平屋の建物があって、中が十数室に区切られている。各部屋でも宴会、ある大部屋などは、
ギターの伴奏で大合唱大会中であった。又或る部屋は炊事専用のようだ。多分教会か町が安く貸しているのだろう。とにかく、底抜けに楽しそうな人々だった。
教会は、立派なもので、内部もきらびやかである。但し、レオンで入手した詳しい資料（後述）にもこの教会は出て来ず、サンチャゴ巡礼とは関係ないらしい。
しかし地図に出ている位なのだから、地方では有名なのだろう。スペイン人の生活の一端をまた見せて貰い、無駄ではなく非常に良かった。

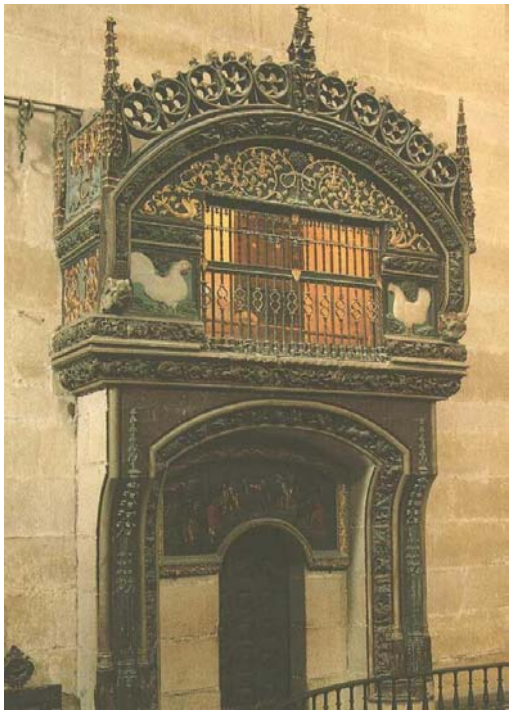
ロス・アルコスに戻る道の看板に English spoken と書いてあるホテルを見つけ、そこに泊まる事にした。
ホテル　Monaco　（２星）　実際は、英語がかすかに解る者しかいなかった。夕食も、ホテルでとる。

５月２２日（月）

朝散歩。ホテルはサンタ・マリア教会の隣にある。ここは１２～１８世紀にかけての、ロマネスク、ゴチック、プラテレスク、バロックの要素の混じった者らしい。この町は中世、経済的に重要な地位を占めていたのだそうだ。ここも大修理中で中に入れず。ﾌｧｻｰﾄﾞ前に野宿している者（徒歩巡礼者？）あり、毛布にくるまっているので、顔など見る事出来なかった。

ⅩⅣ.　ブルゴス、サント・ドミンゴ・デ・シロス

Ｎ－１１１に戻り、ナバラを離れ、リオハの【ログローニョ】（Logronyo）の町に入る。大きな近代的な町である。〈i〉を探すが、見あたらず、住人も皆忙しそうにしていて（駐車したところがいけなかったのかも知れないが）、あまり相手にもしてくれず、この町はパスする事にした。
ここから道をＮ－１２０に取り、途中を飛ばし、**【サント・ドミンゴ・デ・ラ・カルサダ】**（Santo Domingo de la Calzada ）に入る。ここもサンチャゴ巡礼路では極めて重要な所である。
詳細は、村田さんの本等に譲るが、極く簡単に触れる。
巡礼の為の道の構築と修復に生涯をかけた、ドミニスクと言う人が死後、聖人に列せられ、彼の墓の上に教会が出来、町が出来た。町名の意は「道路の聖ドミニスク」である。
又、ここにはこちらでは誰でも知っている伝説がある。聖ヤコブの奇蹟により、焼いてある鶏が、生き返り、テーブルの上で３度鳴いたと云うものである。それ以来、教会の中に一つがいの鶏が飼われているのだ。**(次頁左図)**
カテドラル（大きくて立派）に入り、鶏を見ようと探していると、突然頭の上で「ｺｹｺｯｺｰ」と大きな声がした。高いところに篭を作って飼っているのである。次に鳴く時をﾋﾞﾃﾞｵに撮ろうとしばらく待っていたが、なかなか鳴かず諦める。



ここから、ブルゴス迄は90kmほどあり、又相当な山道がある。La Pedraja峠(1130m)である。
カスティーリャとレオンの**【ブルゴス】**（Burgos）の町に入る。**(上右図)**
〈i〉は簡単に見つかった。中年の女性、英語は全然駄目だが、愛敬があり、又勘がとても良い。ブルゴスの市内及び近郊の地図を貰う。サント・ドミンゴ・デ・シロスと云うだけで、行き方と、色々なところの拝観など利用出来時間を纏めたリストをくれシロスの状況を指し示す。本日夕方 19:00 待望のグレゴリオ聖歌聞けるらしい。確認して良かった。

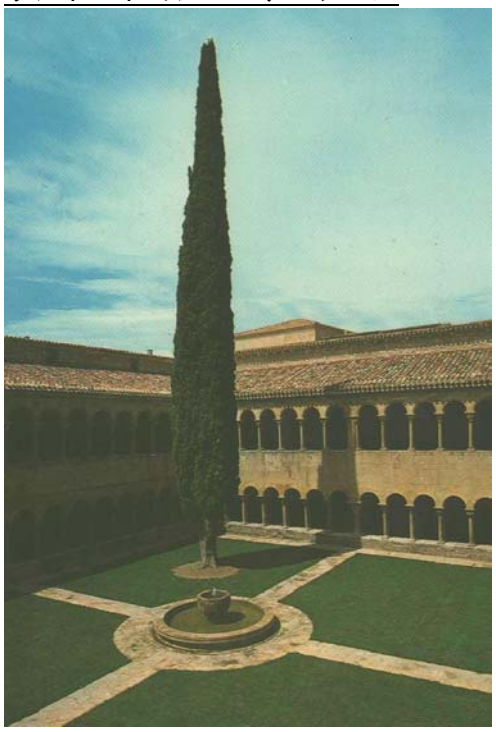
実は、日本でスペイン政府観光局にファックスで問い合わせたところ、土曜の 19:30 からしか聞けないと言う回答を貰っていたのでした。この情報は、「歩き方」の毎日聞けると言う情報と全く異なるもので、がっかりしたのですが、念のため確認してみたのです。

今度の件と言い、カタルーニャ美術館が「歩き方」では、再開となっているのに、実際はまだ閉館中だったり、スペイン内の情報の確認には、注意と慎重さを要する事が段々解ってきた。
要は、現地に近いところで得る情報以外は、全面的には信頼しないと言う心構えが必要らしい。

カテドラルと**美術館**拝観。大きくて、立派と云うしかないが、私が一番興味を持ったのは、美術館にある「地球儀を踏まえ抜身の剣を持った王の像」である。王の名前は調べなかったが、これはある時代のブルゴス、即ちカスティーリャ王国（？多少怪しい）の雰囲気を現したものではないかと思う。法王アレキサンデル６世（在位 1492-1503）の承認を得た
「トルデシリャス条約」により、大西洋上の西経46°37’より東はすべてポルトガル領。西はスペイン領と定めて世界を我が物と思い上がった時代の雰囲気を示すものだと思う。
この条約などについては、司馬さんの本（２３，南蛮の道 Ⅱ）に詳しい。私は、司馬さんの本に教えられて、高瀬弘一郎著「キリシタン時代の研究」も一通り目を通したが、キリシタン弾圧に対する片寄りの無い史観を持つためには、ここのポイントに目を瞑ってはならないと思う。

そばのｂａｒで腹拵えをする。定食（Menu del Dia　950PTS）はサラダ、烏賊のリング揚げ、と白ワイン。
＋カフェオレ、税金込みで 1070PTS。

サント・ドミンゴ・デ・シロス



シロスに向かう。<i>の女性の最短コース（59km、）を少し間違え遠回りする。そのおかげで、古い修道院の廃虚（San Pedro de Arlanza　１１世紀）を見る事が出来た。ここも修理中であった。

田舎道を走り、**【サント・ドミンゴ・デ・シロス】**（Santo Domingo de Silos）へ着く。ブルゴスから６７ｋｍ。

回廊の見学は 16:30 から。時間が近づくと何処ともなく団体客（中年組と少年組）がどっと現れ、受付はごった返す。受付でも聖歌のＣＤ売っている。

シロスの回廊はやっぱり、素晴らしい。この回廊については、日本人だけでも多くの人が語っている。中庭に一本だけの高い糸杉と噴水を置く構図の精神は、簡素な美を愛する日本人の心に特に響くものがあるのだろう。(上図)

19:00　から聖歌聞ける事と場所の確認をする。それではと、そばのホテル　Acro San Juan（２星）　を予約する。

19:00　から約３５分間、教会の中でグレゴリオ聖歌を聞く。聖堂内はだいぶ寒い。セーターを着こむ。

祭壇の両わきに高椅子が１００ほど備え付けてあり、２０人ばかりの僧がオルガン伴奏附きで合唱する。聴衆は約３０名。1)立ったまま、2)礼拝の形で頭を下げたまま、または3)座って合唱するが、1),2)の場合は聴衆の殆ども起立して聞く。そういうものらしい。

終わってから、僧たちは私たちのそばを通って、別の祭壇のある部屋の方へ行ったが、その時の観察では、相当年輩の人も多いようだ。とにかく、雰囲気は非常に良く、来て良かったと思った。

ホテルに戻ってから持ってきたＣＤを聞く。気がついた事は、オルガン伴奏が無い事の外、ＣＤの方が、高い音を多用しているように思えた事である。ホテルのレストランで夕食をとる。

尚、ホテルのカフェテリヤでも聖歌のＣＤ（3300 PTS）売っていた。このＣＤは、町中を潤している事になっているらしい。

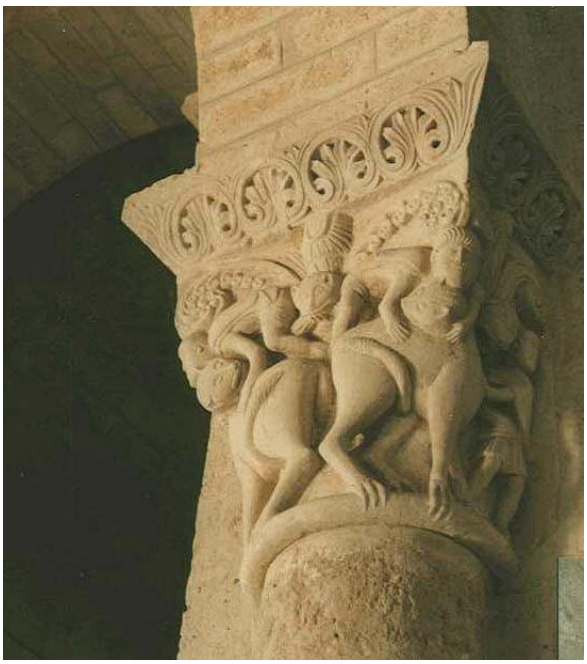
#68　95/ 6/28　　スペイン　ドライブ旅行記（９）　　敏翁

５月２３日（火）

朝、ホテルの部屋から外を眺めると、回廊の上に例の糸杉が頭を突き出している。
（前頁図）

せせらぎの音も聞こえる中、町の教会の時を告げる鐘の音が鳴り響く。実に気分の良い朝である。
さて、今日はレオン迄約３００ｋｍのロングドライブをしなければならない。というのもレオンのパラドールを日本で予約済みだからである。

ＸＶ．　フロミスタ、サアグン、レオン



いつもより早くホテルを9:00に出発。ブルゴスに戻り、Ｎ－１２０に乗り、Osorno（Burgos から 64km)でＮ－６１１にはいり、**【フロミスタ】**（Fromista）の町にはいる。
先ず、**サン・ペドロ教会**に入る。ゴチック様式のものである。中に、「横たわるキリスト像」があったが、「当身大？」のキリストの死体の像であり、傷口、血糊まで写実的に表現されている。（上左図は「ピエタ」像）
実は、見たところがはっきりしなくなってしまった為、記さなかったがもっと写実（？）が過ぎて、打たれた為の痣だらけのものも見ている。これらは、バロックのものだろう（？）。
普通の日本人には、なじめないものだが、こういうものを作った人々の精神構造には大いに関心がある。
ロマネスクからゴチック、ルネッサンス、バロックと時代が進むに連れて、表現が陰惨になってくる理由が知りたい。

つぎに**サン・マルチン教会**を訪れる。ここは、巡礼路におけるロマネスク形式の最良のものの一つとされている。この聖堂内に一人佇むと実にさわやかで心に落ち着きを感じる。ここの柱頭(前ページ右図)も美しい。

今日は本当に暑くて喉が乾く。今までの経験で、ビールを飲み過ぎると眠く成りすぎ、カレェオーレやコーラもしつっこい。こういう時、炭酸水（Agua con Gas）が良い事を発見。当分これを重点にする事にする。

Ｎ－１２０に戻り、**【サアグン】**（Sahagun）まで一気に行く。(Osorno から 72km)。廃虚の門（Arco de San Benito）らしきものが有り、そのそばに駐車、付近を歩き回る。ムデハル（Mudejar）形式の建物が多い。

サン・チルソ（ San Tirso ）教会(左図)は１２世紀のロマネスク・ムデハル形式、**サン・ロレンソ**（San Lorenzo ）教会は１３世紀のムデハルの混じったゴチック形式、等など。

ーーー　ムデハルとは　「歩き方」より　ーー
ムデハルとは、キリスト教徒によってレコンキスタされた土地に残ったイスラム教徒の事を指す。
そのイスラムの職人によって伝えられたのが、ムデハル美術である。
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
暑くて、何回もｂａｒに飛び込んでは、炭酸水重点で水分の補給を図る。

サァグンからレオン迄８０ｋｍ休まずに走る。 15:30 **【レオン】**（Leon）の町に入る。
<i>はカテドラルのまえ、すぐ解ったが午後は 17:00 オープン。

とりあえず、**パラドール**に入る。その豪華さにびっくり。 San Marcos （５星） 入り口正面に大きな**マタモロス**（モーロ人殺し）の像**(上左図)**が飾ってある。駐車場も地上にゆったりと取ってある。
とにかく喉が乾き、備え付けミニバーのビール（小瓶で300PTS と高い）２本呑む。
再び車で、カテドラル前迄行き適当なところに駐車。**(上右図はカテドラル西正面全景)**

この**カテドラル**の**ステンド・グラス**は世界一美しいとされている。私は、数年前に、ここと１，２を争うフランスのシャルトル（記憶では曇っていたような気がする）も見ている。今日は、快晴で 17:30 と条件も最高（西の薔薇窓に日光が直射）のせいもあるが、やはり、ここの方が綺麗である。
又ここはハーフ・ミラーの原理を使って、西と東の光を重ね合わせるという奇術的な事をしているが、この効果も著しい。
(前頁図はその効果を写したものだが、失敗作)
しかしこれは、宗教的に考えると行き過ぎなのではないかと思えてくるほどである。
ここで、日本語を久しぶりに聞いた。ツァーの人たちらしい。
付属の美術館も拝観。観客は私の外一人だけ。案内の女性が一つ一つ部屋の鍵と照明をコントロールしていた。しかし英語全く駄目でコムニケーションは最低のレベル。
〈i〉を訪れる。英語全く駄目。広域の地図無し。サンチャゴへ行くのだと云うと、パンプローナで貰った資料の仏語版を見せる。いらない。ただ、カスティーリャ　と　レオン地方を紹介する綺麗なカラーのパンフレットを貰った。大判（英語）で４８頁もあり、これで絵葉書は買わないで済みそうである。

ホテルに戻る。本日の走行距離、３０４ｋｍ。今までの最高である。

ホテル内にある教会と美術館（有料）を見る。ここでは６５才以上無料の特典を得た。受付の女性は、その可能性を遠慮がちに私に告げ、私が旅券で６５才になっている事を知らせると、そうは見えない、もっと若く見えると言ってくれる。お世辞と解っていてもそう言われれば、うれしい。

夕食は、ホテル。評判が良いせいか、宿泊客に限定しているようである。それでも大変込んでいて、ボーイは大忙し。
日本人団体客も入っている。５星の所のレストランには初めて入ったが、客は殆ど全員正装、男はネクタイを着けていた。私は、ジャケットは着ていたが、ノーネクタイ。
値段は高いが、味は特別感心するほどの物でもなかった。

５月２４日（水）

パラドールの朝飯は良い。ここもバイキング形式だが、飲物はボーイが持ってきてくれる。昨夜と同じボーイが、Cafe con Leche（カフェオレの事）というと、一つのポットにたっぷりコーヒー、もう一つの同サイズのポットにたっぷりの温めたミルクを持ってきた。
大した事ではないが、昭和一桁生まれの私などは、こんな事で豊かになった気分になる。

ホテルを出て、**サン・イシドーロ教会**に行こうとするが、何回町の中を回っても旨く行けない。仕方が無いので、昨日のところに駐車。歩いて行く事とし、行き方を聞くと、道路に埋め込んである貝のマーク（帆立貝はサンチャゴ巡礼のシンボル）に従って行けば良いとの事。

教会も良いが、ここで一番印象深いのは、やはり美術館内にあるパンテオンの天井まで埋め尽くされた**フレスコ壁画**だろう。**(左図)**
教会（旧）は、１０６３年に建てられたものだが、壁画は１１６０年ごろ描かれたものらしい。
村田さんの本によると、ロマネスク期に壁画がはたしていた役割は、ゴチックになると、ステンド・グラスにとってかわられたとしてある。
この効果は、ディスプレイ技術としては確かに素晴らしい改善が、宗教として考えるとき、進歩と言えるのかという問題は残る様に思える。
この美術館の受付け兼販売のところで、良い本を入手する事が出来た。
それは、Millan Bravo Lozano ″A Practical Guide For Pilgrim -- The Road to Santiago″ Everest, 1993 という 245 頁の本である。2500PTS。

これは、ｿﾝﾎﾟﾙﾄ峠、及びｲﾊﾞﾆｪﾀ峠からサンチャゴまでを３５段階に分けて、各段階について、次の構成になっている。
1 ： 詳細な地図。　これには歩くときの経路が記されている。大きな町では、町の地図も加えられている。
2 ： ホテル､キャンピングサイト、及び避難所（Refuge ： 極端に安く、場合によってはただで泊まれる所であり、各段階　に必ず１，２箇所ある）の情報。
3 ： レストラン、ガソリン・スタンドに関する情報。
4 ： サイクリングの場合の注意、とドライブのコース。
5 ： 歴史と美術と伝説。一段階毎最低１０枚の写真入り。
6 ： 過去の巡礼者（有名なエムリー・ピコー<1130 年頃書かれたもの>外３名）の、当該場所に対する記述。
等。

著者自身は、２回通して歩いた外、十数回部分的に歩いて、精度を上げたという。この外３名のフィールド調査員も使っている。

というように、巡礼者にとって、実に良くできた本である。

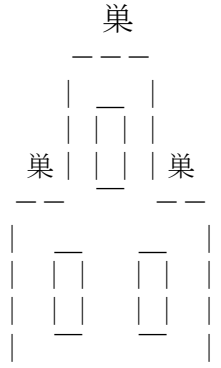
日本でも、四国八十八ヶ所遍路、や西国、坂東、秩父の観音巡礼等では、この種の本が出ていて、その殆どを私は見ているが、それらと比べても、この本の方が配慮の範囲が広く、出来が良いように思う。

私のスケジュールも、ここから、サンチャゴまでは多少時間の余裕も有りそうなので、もう少し、細い道にも踏み入って見たいと思う。

#71　95/ 6/28　　スペイン　ドライブ旅行記（１０）　　敏翁

ⅩⅥ.　アストルガ　から　ビリャフランカ・デル・ビエルソ

サンマルコス橋を渡り、レオンを離れる。Ｎ－１２０を３０ｋｍばかり行くと、【Puente de Orbigo】（オルビコ橋）（上左図）
。Ｎ－１２０に平行に少し離れた処で、オルビゴ川に架かっているこの橋は巡礼路の橋としては長く美しいので有名。橋の向かう（Hospital de Orbigo）に小さく教会の鐘楼が見え、橋の下は清流が流れ、まわりの景色も美しい。橋のこちら側の袂に小さな教会があり、その鐘楼にコウノトリが巣を作っている。



左図で、想像して貰いたい。珍しいので、ビデオに撮ったりしたが、これにはこれから何度もお目にかかることになる。
帰りしなに、教会（閉まっていた）を覗いていると、何やら、注意！らしい事が書いて有る。勿論スペイン語なので、立ち止まって見ていると、頭に冷たい物が落ちてきて、慌てて立ち退く。鳥の糞に注意と書いてあったらしい。

ここから【アストルガ】（Astorga）までは１５ｋｍ。

カテドラル、その付属美術館もいいが、ここでの見物は、ガウディ設計による巡礼路美術館（Museo de los Caminos）（右図）。新ゴチック形式の教会兼美術館になっており、中の雰囲気もふつうの教会とは異なり、柔らかい光に包まれた（採光に工夫がある）温かいもの（私はアール・ヌーボーの感覚を感じたが、そんな事を言ってる解説書はなく、全くの私見である）である。巡礼路に

関する展示物にも面白い物が多い。例えば木彫りの聖ヤコブ像などは沢山あり、マタモロスも有るけれど、もっと古拙でまるで「こけし」の様に温かみを感ずる事が出来るものも多い。
　いよいよここから、山道に入る事にする。
　先ず、【Castillo de los Polvazares】。赤みかかった色の小石を敷き詰めたゆるい坂道の両側に、同色の石積みの古い家が並んでいて（同じ色の教会もある）一種独特の雰囲気に満ちている。
　しかし、ここも観光の名所になっているらしく、坂道の下の広場まで観光バスが入っていて、歩きにくい坂道を集団が通り過ぎて行った。
.

.

　次に、El Ganso。藁葺の屋根を始めて見る。

　道に沿って、小さな教会が点在する。鐘楼も上図にあるような２階建てではなく、上図の上の部分のみ（鐘一つ）。それでもその上が平らなものは、必ずと言っていいほど、コウノトリが巣を作っていた。
　写真や、ﾋﾞﾃﾞｵはかなり撮ったが、帰国後整理してみると、上記ｶﾞｲﾄﾞﾌﾞｯｸの写真と一致しないものは、何処のものか、さっぱり解らなくなってしまっている。(上図参照)
　しばらく走ると、標高は相当高くなり、【Foncebadon】に到る。ここから El Acebo あたりは廃村で有名？である。
柳宗玄「世界の聖域 16　サンチャゴの巡礼路」に強烈な印象を与える写真が載っているを見たので、ぜひ訪れたいと思っていた場所である。同村は、１２世紀には巡礼者のためのホスピタルが出来たほど重要な休所だったが、今は、完全な廃村であり、人影もない。石作りの家の半分以上は崩れさって瓦礫と化している。

　ここからもう少し登ったところがこの道の最高地点（標高1504m）で、【Cruz de Ferro】。砕石の小山（といっても相当大きい）に、５ｍほどの木の先に鉄の十字架をつけた物が立ってる。(前頁図)

　この辺は、相当急な山道なのだが、自転車で巡礼（？）している者が相当多い。歩いている者もいる。
　私は日本で、四国、秩父、坂東と車で回ったが、日本では、自転車で回っている人に会うのは、極めて稀であった。自転車文化が違うようだ。歩いている人も、こちらの方がずっと多いようだ。

　坂道を、ほぼ下りきったあたり、Molinaseca のｂａｒでカフェオレ。
だいぶ時間が経った（16:30頃）ので、そろそろ今日の宿の心配をしなければならない。ここから少し走ると大きな町　Ponferada があるので、ホテルを探す事にする。
　町に入ると、いくつかのホテルの標識が目にはいる。その標識を追っていくと、いつの間にか消えてしまい、見つける事が出来ない。何回か発想を変えてトライしても駄目だった。<i> を見つけたが、午後は休み。

もっともこの町は、大きな道が何本も輻輳していて本質的に分かりにくい構造になっていると言える。それにしても、旅客に不親切な町だと、かってに怒り、次の大きな町**【ビリャフランカ・デル・ビエルソ】**（Villafranca del Bierzo ）に行く。24km。

この町の方が、小さく、町の真ん中の広場（Plaza Mayor）に駐車。目の前のホテル San Francisco （１星）にする。
泊まるところも段々落ちてきた感じであるが、出来るだけ巾広い経験をする事という今回の旅行の主旨は段段に成就しかかっている様に思う。車は広場に置いたままで良い。
ホテルで貰った地図を参考に、町を散歩してみる。教会（サンニコラス）に入ってみる。ミサが始まるところだった。大きな教会だが、参加者十数名。
ホテル紹介のレストランを探す。３店紹介してくれたが、２店は休み。Nacho と言う店に入る。裏寂れた雰囲気の漂うところだった。スープ（素麺を切った様な物が煮込んである）、ミックスド・サラダ（量が信じられないほど多い）、地方の料理（チーズと豚肉をハムで巻き、小麦粉をまぶし揚げたもの　10 x 20 x 3 cm ２枚　にポテト・フライたっぷり）、ハウス・ワイン。量が多すぎ、食べきれず。カフェオレ付けて 2100PTS 。

５月２５日（木）

今にも雨が降り出しそうな空模様だが、散歩に行く。ホテルの裏が小高い丘になっていて、**サン・フランシスコ教会**（これがホテルの名の元）がある。ここは眺めが良く、町全体を見渡せる。
巡礼にとって重要だったのは、昔の町の入り口にある**サンチャゴ教会**であり、病気などで、これ以上巡礼を続けられない者は、ここの「免罪の門」までたどり着けば、サンチャゴ・デ・コンポステーラ迄行って、聖ヤコブの墓にお参りしたと見なされるとされていた事である。それはここが、巡礼路ではカスティーリャ／レオン最期の大きな町であり、又ここから、セブレイロの難関が待っている事に依るのであろう。
案内書で、中世の雰囲気を残しているとされている　El Agua 通りをぶらつく。ここは昔、巡礼が通っていった道である。今朝はひっそりとしていて人通りも無く、狭い道の両側に紋章らしい大きな彫刻などがついていた家があったり、家家の出窓に草花の束（殆どが枯れていた）が巻き付けてあったりしてなかなかに趣のある町並みであった。
昨夕訪れたサンニコラス教会を少し離れた所からみると、鐘楼（ここのは大きい）の上にコウノトリの巣が３つほどあり、鳥がまわりを飛び回っていた。

このホテルでは、カードでの支払が出来ないという。現金が心細くなってきたので、相談すると、広場の向かい側にある銀行
（Banco Herrero ＜鍛冶屋という意味＞）で換金出来るという（換金出来るという表示は無い）。500$ で 63262PTS と最高の率であった。レート自体の変動も有るだろうが、手数料も（632PTS）確かに安い。

ⅩⅦ.　オ・セブレイロ　から　アルスア

ホテルを出て、出来るだけ田舎道を通ってオ・セブレイロに向かう。

道を、カウ・ベルの音とともに牛の大群が悠々と歩いている。今までにもこういう事は数回あったのだが、今回の牛は特別ずうずうしい。私も最低速で走っていたが、牛の頭が右ドア・ミラーに衝突。その牛は、何が起こったのか解らないといった表情でじっと私の顔を見つめていた。

雨が降り出し、段々と霧が濃くなってくる。ﾌｫｸﾞ・ﾗﾝﾌﾟをつける。寒く、セーターを着込む。それでも寒く、初めて暖房にする。視界１０m位の道をしばらく走って、やっとガリシアの**【オ・セブレイロ】**（0 Cebreiro標高1293m ）に着く。
こういう難所だから、昔からここにはホスピタル（１１世紀の記録があるそうだ）があった。ここは又昔の生活が残っている事でも知られていて、小さな博物館（ Pallozas ：藁葺屋根の丸い家 ）になっている。
雨と霧の中、教会、博物館 と回り、ｂａｒでホット・コーヒーを呑んで、セブレイロを後にする。

少し下ると雨は止んだ。**【Hospital da Condesa】**の村に入ってみる。ここには９世紀にホスピタル（巡礼路で最古のものの一つ）が建てられた処という。村の教会は、可愛らしいもので、その脇の小道を牛の群れが通り、牛糞の臭いが充満している小さな集落だった。

少し走ると、又雨が激しくなる。途中をちょっと飛ばし（18km）【サモス】（Samos）の町に入る。ここの修道院はスペイン最古のものの一つと云われている。非常に大きな建物である。土砂降りの雨の為、ちょっと立ち寄っ

ただけで通過する。

ここから【サリア】（Sarria）の町は近い。11km。ガリシアの天気は、変化が激しく、今度は晴れている。城の廃虚（これは１５世紀に起こった人民戦争の傷跡だという）があり、エル・サルバドール教会、サンタマリア教会と一回りする。
ここも又歴史の古い町で、記録は何と６世紀迄遡る事が出来るという。

ここから、【ポルトマリン】（Portomarin）迄は９ｋｍ足らずである。
Minyo 川畔のこの町は、新しい町（完成１９６２年）で、古い村は Belesar 貯水池の完成で水底に沈んでいるという。
サン・ニコラス教会そばのｂａｒで昼食をとる。この教会は、古い石材を生かして、この地に再建された物という。

英語がほんの少し出来る女の子（中学生？）にマッシュルーム入りオムレツを頼んだ積もりが、別々に出てきた。しかし彼女は商売が上手で、「うちのデザートはおいしいわよ」とか云う。母親はにこにこしながら、ときどき覗きに来るだけ。良く解らないので、台所を見に行く。良さそうな苺があるので、その生クリームかけを頼む。量も味も良かった。ビールとコーヒー附きで、1350PTS。

ここから、３６ｋｍばかりの所、Melida の町に入り、ホテルを探すが、どうしても、見つからない。
Ponferada と同じ現象である。しかしこの町は道が一本交差しているだけなのだ。となるとこれは私の能力の問題という事に成るらしい。疲れてきたので、面倒になり、Ｃ－５４７沿い、【アルスア】（Arzua）近くの道の横にある　Bar-Hostel 0 Retiro （星無し）に泊まる事にした。主人、おかみさんとも英語全然駄目。

夕食に降りていくと、こんな所にも１階奥にちゃんとしたレストランが付いている。客はいない。主人は、ｂａｒの前のテーブルに座って食べろという。ｂａｒの客（多分地元の人）の一人が、英語が多少出来、面倒見てくれる。
ガリシア風スープ（Caldo gallego　豚肉<目立つ程入っていない>と野菜の煮込みスープ）、豚の炒め物にハウス・ワイン。
みんな、ＴＶで闘牛を見ている。セビリヤからの実況中継である。今回闘牛の実物を見るチャンスは無かった。ＴＶでは、最期に牛にとどめを刺す前の闘牛士の顔のアップなどが映り、なかなか迫力がある。
しかし、次から次と牛が殺されるのを見ていると、牛が可愛そうになってきた。どうして牛は、赤い布ばかり正直に追いかけるのだろうか？
私は、これは牛のトレーニングに問題があるのでは無いかと思った。牛のトレーナーが、牛にもっと戦闘術を教えなければフェアでは無いように思った。例えば、赤い布を外してその右とか左とかを突かせる。そして右／中／左をランダマイズするなど。これが、ワインを飲みながらＴＶを見た私の感想である。（勿論ピントがずれているのかも知れないが）

６月１１日ＮＨＫ・ＢＳ２で放映された「素晴らしい地球の旅ースペイン・天才たちの国」に闘牛とは何であるかが紹介されていた。それによると、闘牛用牡牛は、闘争心のみは高める工夫をするが、それ以外は出来るだけ自然に育てるもののようである。
となると、闘牛は若干の危険は含むものの一種の儀式であると言えよう。

#73　95/ 6/28　　スペイン　ドライブ旅行記（１１）　　敏翁

５月２６日（金）

朝、目を醒まし、帰国が迫っていて、フライトの７２時間再確認を忘れている事に気付く。星無しのホステルには部屋に電話がない。下のｂａｒでおかみに頼んで電話、無事再確認済んだ。

さすがに料金はとても安い。部屋代 2500PTS、簡単な朝飯も食べたのに食事代 900 PTS 。これだけである。電話代など忘れているのかも知れない。

ⅩⅧ.　コンポステーラ、パドロン、フィニステーレ

ここから、サンチャゴはもう近い。
Lavacolla （下品だが、「秘所洗い」と云う意味）は気がつかず、通り過ごした。ここには小川があって、昔巡礼者はサンチャゴに入る前にこの流れで身を清める事になっていたのである。Monte del Gozo （喜びの丘）は、やっとの事で気がついて、１ｋｍ（?）先のﾛｰﾀﾘｰでUターンし、訪れる事が出来た。
ここは昔、巡礼者はこの丘に駆け上がって、サンチャゴ大聖堂の尖塔を見いだし、長い巡礼の苦しみももうすぐ終わり、すぐに聖ヤコブに会える事を喜んだ所である。

大きな公園の様になっていて、丘の上には大きくて立派な記念台(上左図)がある。
昔の感激のおすそ分けでも頂こうと見渡したが、尖塔を見つけられない。車に戻り、双眼鏡を引っ張り出しても認識する事は出来なかった。
ところが、夜ホテルで、風景をスキャン撮影しておいたビデオを繰り返し見ていると、右手の林の木陰に２，３秒映っている事を発見した。見当をつけた方向がずれていたのだった。(上右図の白矢印)
林は、私有地にあるのだろうが、何とかならないものか。
(後記：後で分かったのだが、少し離れたところにもっと良く見える地点があるようだ)

【サンチャゴ・デ・コンポステーラ】 (Santiago de Compostela) の町に入る。
コンポステーラとは、星の野原の意味だとされる。星は、これもサンチャゴのシンボルである。フランスから見ると銀河の流れの果てにサンチャゴがあるような方向関係になっているからだろう。
しかし、コンポステーラは、単に墓の事であり、大昔から墓地であったのだという説も有力である。
この当たりの事、及びサンチャゴに聖ヤコブの骨があるという伝説が広まった経緯、巡礼及び巡礼路発展の歴史等については、多くの書籍が出版されている。が良くまとまっているものとして、私は渡辺昌美「巡礼の道」　中公新書 566 を勧めたい。但し、出発前に八重洲ブックセンターに行ったが、絶版になっているのか置いて無かった。それで残念ながら、持参書籍に加えられなかった経緯がある。
この本の書き出しは、ドーデの「風車小屋だより」の中の「星」と云う短編の一節からとってきてあり、うまいなあと感心した記憶がある。

繰り返しになるが、スペイン語のサンチャゴは、フランス語でサンジャック、英語でセイント・ジェイムス、日本語で聖ヤコブとなる。

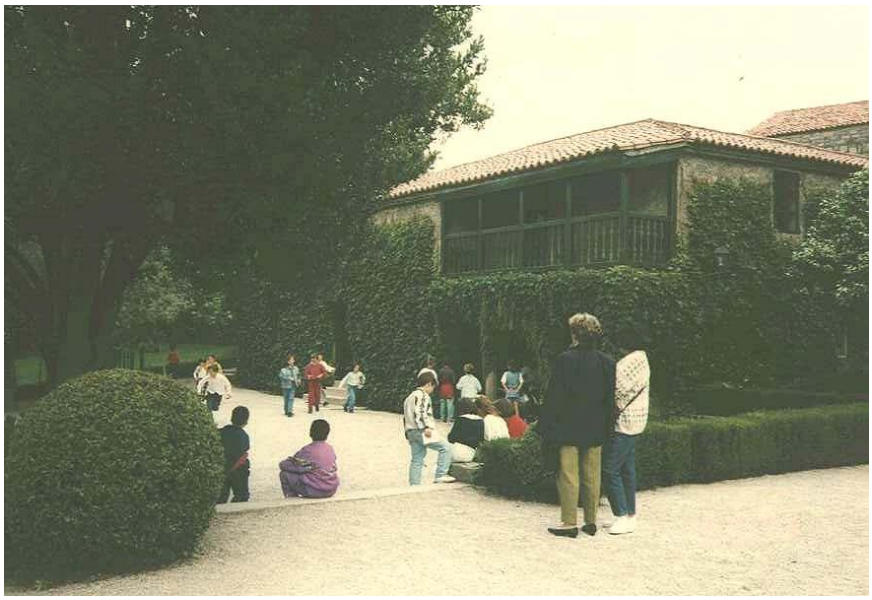
初めにぶっつかった公共大駐車場（Juan XXIII ）に駐車。ここからカテドラルを通り過ぎて、<i> までは結構距離（徒歩１０分位）がある。サンチャゴの町は大きく、複雑で、<i>を捜し当てるまでがたいへんだった。聞いても人によって言う事が違い、あちこちとさまよう始末。後で貰った詳細な地図で解った事だが、<i> は比較的近いところに２つあるのである（「歩き方」にはその１つが載っている）。それが情報の混乱をもたらしたのだと思う。
やっと <i> にたどり着く。男２人（５０がらみと７０がらみ）何れも、英語全然駄目。パドロン（後述）の地図もない。ガリシアの地図もない。
しかしホテルのリコメンドをしてくれ、助かった。カテドラルに近くて、便利で且つ駐車可能なホテルとして、Compostela（３星）とUniversal（２星）を勧めてくれた。この２つは、Plaza de Galicia をはさんでいて、いず

れもこのPlaza の下の公共地下駐車場を利用している。
　電話で Universal を２泊予約した。実は予約のための電話の有るところを探すのでも、苦労した。この町には公衆電話ボックスというものが全く無い。専用の店があり、中に小さく囲われた電話機が沢山置いてあり、電話を掛けた後、レジの様なところで料金を支払うシステムになっている。慣れれば、便利なのだが、初めは、理解するのに時間がかかる。それに、この事に関して、<i> は何も教えてくれなかった。
　又後で冷静に考えてみると、<i>からホテルまでは歩いても５分程度しかかからないのであった。

　公共駐車場の料金は安く（一日フルで 754PTS）、このホテルは便利で良いホテルだと思う。

パドロン・西の塔

　この節だけ文章のスタイルを変えます。このスタイルの方がそのときの気分に合っているように思えたからです。
　サンチャゴの参拝などは後にして、まずパドロン方面に出かける事にしました。
　<i> で関連資料を何も貰えなかったので、パドロン関係は、林ふじ子さんの本だけが頼りです。



　【パドロン】（Padron）は、Ulla 川畔の町で、聖ヤコブの遺骸が上陸したところ（昔の名は Iria Flavia）とされており、「サンチャゴへ行っても、パドロンへ行かなければ、巡礼を行った事にはならないのではないか」と言われる事さえあるようです。サンチャゴからパドロン迄は、Ｎ－５５０で一本道です。

　しかし、パドロンの町は、この事にそんなに熱心では無いように見えます。むしろ、この地出身の１９世紀の女流詩人**ロサリア・デ・カストロ**の方に熱心のようです。何と言っても、彼女は５００ペセタのお札に成っているのですから。
ロサリアに関係ある場所の地図が随所にありました。

　ロサリアの生家は**博物館(上図)**に成っているのですが、そこに行ってみました。
鉄道パドロン駅のすぐそばにあり、花の咲き乱れた綺麗な庭園を持ち、緑の蔦で家の正面が覆われた美しい２階建ての家でした。団体の小学生が来ていて、家の中をとびまわってしました。ロサリアにはこの方がふさわしいと考えての事か、先生らしい人がいましたが、全く制止しようとはしません。
.
.

..

Sar 川（Ulla 川の小さな支流）のほとり、「しなの木」（林さんによる）の並木道（なかなか感じの良いところ）を歩いてみたり、教会（閉まっている）（上左図)を覗いてみたりしましたが、それ以上アクセスしようにも出来ず、諦めて、林さんの本にある　Torres de Oeste　**（西の塔）（上右図)**に行ってみる事にしました。

ここも、積極的な宣伝は全く無く、行き方を見つけるのに苦労しましたが、走り回っている内に、道の片隅にこの地方の道路地図がある事を発見、どうやら行く事が出来ました。

Ulla 川をわたり、約１ｋｍの所をＮ－５５０からＣ－５５０に進めば、約１０ｋｍで着きます。再び Ulla 川を渡る長い橋の進行左手に半壊の「西の塔」がありました。

これは、林さんによると、ローマ時代の物で、両岸に建てた塔の間にチェーンを張って敵船の侵入を防いだのだそうです。

ここまで来れば安心と、対岸のｂａｒで軽い食事。ハム入りオムレツとビール、カフェオレ。ｂａｒには西の塔のそばに丸木船（？）で大勢で乗り着けた写真が飾ってありました。

川岸に降りてみました。対岸から見ると、橋の右手に西の塔とそのそばに小さな教会があり、左手には、これも残墨らしいものの名残が小さな島になって残っています。島には十字架が立っていました。そして、その間に赤い木製の絵巻物にでも出てきそうな形の船**(上図)**が泊まっていました。景色を引き立てるのには素晴らしい添え物ですが、いったいこれは何なのでしょうか？

全体の雰囲気は、林さんの本に、ロサリアの詩（富成博訳）が載っていますが、全くその通りと言う感じです。それでそれをここに掲載させて頂きます。

西　の　塔

寄せくる潮（しお）の　　高まれば
波うちしぶく　　塔のあり
水のシーツの　　くるむなか
わびしくひとり　　ただずめる

現物を見ながら、この詩を読むと、実にいい詩であり、いい訳であると実感出来ます。

しかし、上述のパドロンの町で見たロサリアお勧めコースには、この西の塔は入って居ません。

ここで普段の文章のスタイルに戻る。

だいぶ時間のロスがあり、ホテル予約のチェック・インのタイムリミットがちょっと心配になり、今日はここ迄で、サンチャゴに帰る事にした。

帰りは大雨になった。大雨の中、又道が解らなくなり、市場らしい所に飛び込んで（家の外では地図を広げられない）道を聞いたら浮浪者みたいな男に絡まれ、対応にかっとなっている間に傘をどこかに置忘れると言うような事もあったが、詳細は省略する。

ホテルに帰っても、雨は降り止まず、ホテルのそばの店で、安物の傘を買う1100PTS。

夜、ホテル紹介のレストラン　Fornos に行く。この店はホテルの斜め前にある。英語は全然駄目だが、結構有名なレストランらしく、客の入りは良い。ミシュラン・グリーンを片手にした客も有り、載っているのかも知れない。

前述の　A Practical Guide ･･･ の８店の中にも入っていた。

味はそれほどとも思わなかったが、その量の多さには、驚いた。

#74　95/ 6/28　　スペイン　ドライブ旅行記（１２）　　敏翁

５月２７日（土）

サンチャゴ・デ・コンポステイラ

私のスペイン旅行も実質今日一日となってしまった。

曇り空だが、雨の心配は無さそう。**カテドラル**に出かける。

オブラドイロ広場（Plaza do Obradoiro　「歩き方」ではスペイン広場となっている）から見る大聖堂の正面（フアサード、これを特にオブラドイロと呼ぶ）は、圧倒的な迫力で人に迫ってくる。これは好き嫌いの別れるところで、村田さんは、悪趣味だ、嫌らしさがあると手厳しい。

私は、ちょっと違う見方をしたい。直感的に、これはキリスト教の世界に対する勝利を高らかに宣言しているディスプレーだと感じた。中央高いところにいる聖ヤコブは、ここではマタモロスの形は取っていないが、イスラムを武力で追い払ったキリスト教の力の象徴である。

これが完成したのは、１７４７年だそうで、ヨーロッパ人は自信に溢れていたのだ。ロマネスク時代は、美術品、建築からみても、私などは好きだが、完成の度合い、精巧さから見て、イスラム文化に遅れを取っていて、ヨーロッパ人もその事は解っていたのだと思う。

それが、ゴチック、バロックと変化していくドライビング・フォースの一つだったと思う。

植民地支配を広げるなど、政治、軍事、経済的にもヨーロッパ全盛時代の真っ盛りであったが、ゴチックの尖塔、ステンド・グラス、グレゴリオ聖歌を得て、文化的にも、イスラムを抜いたという自信を得たのではないか。

その自信が、このファサードに全面的に表現されていると見た。

この広場の横に、パラドール　Hostal de los Reyes Catolicos がある。ちょっと入ってみたが、やたらに仕切が多く、従業員の表情にポスピタビリティを感ずる事が出来ないので、すぐに出た。

ファサードの入り口を入ると、「栄光の門」（Portico de la Gloria）である。彫刻に満ちている。解説は、村田さんの本に譲る。

この比較的狭い空間は、ツァーの団体客で一杯だった。英語、ドイツ語のガイドの解説が混線して聞こえてくる。

中央の柱の高い所に、サンチャゴの座像がある。このサンチャゴは実に柔和な表情で、巡礼達を向かい入れてくれる。この像の下に、５つの窪みがあり、巡礼達は、この窪みに右手の指を入れ、柱に額づいて長い巡礼の旅の完了を告げ、祈ったのだと言う。

現代のツァー客の殆どは、ガイドの説明を聞いた後、指を窪みに入れていたが、額づく者は、しばらくビデォ撮影していたが、一人も居なかった。

祭壇(上左図)では、ミサが始まっていた。祭壇中央のサンチャゴ座像(上右図)は瓢箪をつけた杖を片手にしている。これは巡礼姿のサンチャゴを現している。この像は、金ピカ作りの上、強烈な照明で、燦然と輝いていた。（これも村田さんの評価は厳しい）　参加者は、みな敬虔な面もちで座っている。正面からビデオ撮影するのは、気が引ける雰囲気である。ところが、どやどやとｱﾒﾘｶのツァー客がなだれ込んでくる。ﾌﾗｯｼｭを焚いて写真を撮るやら、傍若無人。私も悪のりしてビデオ撮影。

１０時になり、付属の美術館が開く。３ヶ所に別れているのだが、最後にまわった部分（これが大きい）の一室には、旧大聖堂の彫刻群がある。詳細は、林さんの本に譲るが、サンチャゴのイメージが、今の形に変化してゆく過程が解る。ルーベンスやゴヤの下絵によるタペストリーも見物である。

銀細工の扉を出て、銀細工の広場（Plaza de las Platerias）に出る。
ここからすぐのデアンの家（Casa do Dean）にある　Oficina de la Peregrinacion　（巡礼事務所とでも言えばよいのか）に行く。前述の　A Practical Guide ････ で、巡礼を完成した者は証明書を貰える事を知ったからである。
２階に上がるとすぐ、事務所があり、若者が２人（一緒らしい）申請中だった。
しかし、これは条件が厳しくて、徒歩、自転車、または馬で１５０ｋｍ位巡礼する事が必要条件だった。馬は１，２度だけ見かけた事がある。

残念がる私に、受付（３５位で、一応英語の出来る）が、証明書は出せないが、歓迎状(次頁図)なら出せるという。私の名前と、日付が入ったものを貰った。

若者２人は、事務所の所長（？）みたいな人が面接（？）している。雰囲気は、道中の苦労話を聞いてその労をねぎらっている感じであった。私にも、フランス語が話せるのならと声がかかった。英語は全然駄目らしい。

証明書（写しが　A Practical ･･･　に載っている）の方は、ラテン語らしく、内容は解らないが、私の貰ったのはスペイン語なので、訳（あやしい所が有るが）を下に記す。

マーク１　　Ｓ．Ａ．Ｍ．Ｉ(*)サンチャゴ・デ・
コンポステーラ・カテドラルは、あなたの大聖ヤコブ使徒の墓への心からの歓迎の意を表します。
とともに、聖使徒があなたに豊かな恩寵を与えられる事を願うものです

サンチャゴ、１９９５－５－２７
サイン(**)

ドン　「私の名前」へ　　マーク２

＊　：Sta. Apost. Metro. Iglesia の略。聖使徒首都教会とでも訳せるのか？　「首都」とは「サン チャゴはヨーロッパの首都である（宗教的な意味で言っているのだろう）」と言う表現を時々見かけた。
**：達筆で読めない。
マーク１：帆立貝の殻、瓢箪つき杖と赤い剣のようでもある十字架の組み合わせ
マーク２：聖ヤコブの像のまわりを次の字が囲んでいる。
OFICINA DE LA PEREGRINACION　　S.A.M.I. CATEDRAL-SANTIAGO
証明書が 200PTS らしいので、そこの箱に 100PTS 寄進する。

町は土曜日のせいか、音楽隊が、繰り出している。

フィニステーレ

丁度、正午頃。ひとまずサンチャゴはこの程度にして置いて、昨日行き損なった、フィニステーレに行ってみる事にした。

昨日回ったパドロン、西の塔を含めて関係位置の概念図にを下図に示します。方位等相当いい加減なものです。

□Santiago

```
        |              Noia     Rio Ulla
        |／|       ___ o       ／
        o  |     ／  ／      o／Padron
 Finisterre  ＼o／   ／       ／
           Muros  |     ／|o Torres de Oeste
                  |   ／  |
   ﾘｱｽ 式海岸     |／     |___
   大西洋                  ___
```

フィニテーレには、ノイア、ムロス、経由で行く事にした。
ノイアは通過したが、林さんによると、ここは「方船伝説」のノアの孫が移り住んだという言い伝えのある処だそうだ。
スペインには、とにかく、恐ろしく古い話や大げさな話が良く似合う処があって、あの謎の多いバスク人も、アルタミラの絵は祖先が描いたのだと信じている者がいるそうだ。
【ムロス】で小休止。ここは湘南海岸に似て、若者の海岸。日本人も結構来ているのか、ｂａｒの若者は分かれ際に、「サヨナラ」と言っていた。

ここの当たりはすべて、リアス式海岸の本場である。実に綺麗な日本に似た風景が続く。
【フィニステーレ】の岬の近くに、美しい教会(下図)があった。多分聖母マリア教会であろう（確認出来なかった）。

アルフォンズ・デュプロンは、その編著「サンティヤゴ巡礼の世界」の中で次のように言っている。
「この地の果て、それをサンティヤゴの巡礼者は実祭に目で確かめる義務がある。つまり、それを自分の巡礼の行為によって、聖化する義務がある。使徒の墓所が巡礼の道程の終わりに位置しているにせよ、この巡礼はふたつの聖地を訪れる事によって完成される。ひとつは、パドロンであり、もうひとつはフィニステールの聖母マリア教会である。」

私の場合、これでサンチャゴ巡礼に関連するスペイン内のすべての地点を不十分ながら一応、通った事になる。

本当のフィニステーレ（地の果て：これも大げさとも言える）は、岩山と小さな燈台があるだけで趣に欠ける感じが否めなかった。
町に戻り、レストラン　Don Percebe で昼食を取る。ビール、レタス・サラダ（卵とか烏賊とかが入っていないだけ）、芝海老のゆでたもの、ヨーグルト、紅茶で1350PTS。芝海老は長さ１５ｃｍ位なもの１０匹を丸毎ゆでた（オリーブ油など入っているようだ）ものにレモンをたっぷり掛けながら、食べる。最高だった。

帰りは、内陸部の道（この方が道は良い）を通り、午後６時頃ホテルに帰着。

土曜の夕方は、各広場など皆お祭騒ぎである。オブラドイロ広場では、スピーカーのボリュウムを一杯に上げて、広場に入っただけで耳が痛くなるような音量で、ロックバンドが演奏を始める。銀細工の広場では、５０人位の編成の吹奏楽団が始める。奇妙な形（火星人のよう）に仮装した、３m位の高さのものが、町を練り歩く。
(左図)
街角では芸人が曲芸やパントマイムをやっている。等など。公園には古本市も出ていたし、大福引き大会（？）が大盛況だった。

ｂａｒ－ｒｅｓｔｒａｎが軒並み並んでいるフランコ通りをぶらぶらし、一軒に入る。鰯の丸焼き、と芝海老のガリック・ソース煮を頼む。前者は約２０ｃｍの鰯４匹を丸毎焼いたものにレモンを絞って食べる。これは良い。
しかし芝海老は、小さな剥き海老でがっかり。やはり、田舎が、安くて旨いようだ。

これで、私のスペイン旅行は終わった。
後は、明朝早起きをして、空港でレンタカーを返し、７時１５分発のマドリッド行きの飛行機に乗れば良いのである。（マドリッドで乗換え成田へ）　多くの人のご好意と、ご援助に依って無事、旅行を終わる事が出来た。

明日、空港からＴＩＳイスパニアのＹさんには、レンタカー旅行が無事完了した事を報告しよう。

又私のつたないスペイン語から真意を読みとり、惜しみない援助を与えてくれた多くのスペインの人々（多分２００人を超えると思う）に、深く感謝したい。

誠に有り難う御座いました。

追記

#160　95/ 7/ 8　　**スペイン　ドライブ旅行記（追記）　　敏翁**

掲題の旅行記をアップしてから、気づいた事などを思いつくままに記します。

１）　図書館通い
旅行前に図書館（神奈川県立、及び横浜市立が主体、支倉常長関係は国会図書館も）で、関係図書を５～６０冊読みましたが、これは相当な速読でしたのと実際に見る前には解らないことも多かったので、帰国後主要なものは再読しつつあります。その一部は、ＰＣ－ＶＡＮのＭＳＧには取り込みましたが、その後気づいた事を２，３記します。
1.1)　**堀田善衛**氏の本（「オリーブの樹の陰に」、「情熱の行方」、「スペイン断章」）を読み返す。その中で、堀田さんもジャック・ルーシェ編曲のバッハのファンである事と、レオン・カテドラルのステンドグラスのシャルトルとの比較など私の記述に近い事を知りました。《旅行記（１）及び（９）参照》
私の行動と、記述は堀田さんの影響は受けていない筈だと思うのですが。
1.2）　神奈川県立図書館で、**ロサリア・デ・カストロ**について調べてみたが、次の本しか見あたりませんでした。
世界名詩集大成　１４　南欧・南米　平凡社　昭和３５
この本の中に、デ・カストロの詩集（ロサリアが抜けている）として、「サール河畔にて」が６ページほど載っているだけでした。スペインでの彼女の人気に比べて、日本での知名度は極めて低いことが解ります。
サール（Sar）河畔は私もちょとだけ歩いたので《旅行記（１１）参照》、そのはじめのところを紹介して見ましょう。

ふしぎなざわめきが聞こえる　　年をへた繁みのかなたに　　鳥たちが愛の巣をいとなむ

緑のひろがりの波間に　　窓辺より見えるのは　　むかしあんなに愛した聖堂

むかしあんなに愛した聖堂・・・　　今もなお愛しつづけているかしら
たえまなく揺れ動くわが心の　　あらあらしい移りかわりに　　陰鬱な怨みが愛とともに
胸に宿っているのではないかしら　　（長南実訳）

２）　林ふじ子さん

今回の旅行では、林ふじ子著「スペイン　プレロマネスク紀行」を持参したわけですが、この本には大変お世話になりました。それで帰国後、林さんにＮＩＦＴＹへアップしたＭＳＧのコピーをお送りしましたところ、２回にわたって大変丁重なご返事を頂きました。その中から関係の深い事項を記します。

2.1) 林さんは、スペインやロマネスクのファンの人を大勢ご存じのようです。そして林さんによると、昭和一桁生まれが 境で、より前はスペインに惹かれ、後はフランスに惹かれる人が多いとか。《旅行記（２）参照》

2.2) コリア・デル・リオで１９９２年に行われたお祭りは、４００年祭で、天正遣欧（少年）使節から数えるとどうやら辻褄が合うらしいようです。《旅行記（３）参照》

2.3) 林さんの文章から『ロス・アルコスの丘の上にも、１０世紀にさかのぼる救護院があったとか、１５～１８世紀にかけて盛んになったとか　　現在大衆的になったのは、いわゆる「村おこし」のためでしょうか』
《旅行記（８）参照》　私の記述の中の長屋風平屋の建物は救護院だったものでしょうか？

完